明治十八年初刊

女學雜誌

毎月廿五日發兌

第四百拾六號

要目

明治二十八年十一月二十五日發兌

第四百拾五號目次

第四百拾四號目次

女學雜誌

第四百拾六號

明治二十八年
十一月二十五日發兌

社説

日本的新女子教育

聞くならく、歴史は繰返すものと。然れど願ふらくは餘り近き歴史をして幾度も繰返さしむるとある莫れ。今や、女子教育振興の大勢巨濤の押寄せ來るが如し、最早や、何人も其の滿潮を防ぐと能わじ。左れど、之を善導して合宜の方向に誘引するとを得るや否やは、倘ほ蓋し人爲の手段何如があるかに關由す。

日本元來、女子教育なきにあらざりき。但だ日進の文華に伴なひ、開化の歩武に同ずべき新教育を欠きたるを以ての故と、事々に外國に模倣せんとせし一と時の大流行に捲き込まれたるを以ての故とにて、所云新女子教育なるもの勃然として起り、滿天下の士人狂ふ計りに雷同したり。翻つて、當年の事歷を憶ひ、今にして其の調子外れの極端を追念すれば、たとひ其砌り狂波の中に沒したらんものと雖ども、顧みて前行の狂氣ぢみたるとに噴飯せざるはなからん。

西洋熱一時に下り、反動の氣運代つて漲ぎり、保守古風の好み再たび大流行となりたる其后の時代も、今はしも之を反顧して稍や其の可笑味を覺るとを得べき場合とはなりたり。諸君子最早や覺めざる可らず、たとひ自から倘ほ昏睡すとも、曉鐘の既に如此く鍠々たるを奈何んせん。

十年以前に唱道せられたる日本的新女子教育は、或る時は、臆病なりとせられ、或る時は過激なりとせられしが、今は初めて其中正なるとを覺認さるべき時節とはなりぬ。惟ふに今后の大勢は、自づからにして此の中正に向ふに至らん。十年の素懷初めて徹するの端緒に就き、感謝して斯學の女神を贊め讃ゆるの人士も多かるべし。今は、即はち此の人士の報わるべき時機なり。

左れど、敗軍は油斷より生ず、驕り且つ惰たるときは、忽ま

ちにして警戒あらん。これ天の仁惠ある教訓なり。左れば、同人、今の時機に際して早く安逸の悦こびを爲すとなく、暫らく凱歌を奏するとを延して、正に兜の緒を今一と度び引締むべし。

察するに、前回の如き西洋崇拜熱は、近年にして再たび起り來るとはあるまじ、亦た必らずや之を再來せしむるとある可らざる也。左れど、吾邦人の洒脱にして健忘なるは、文明國中に於て無類たり。新聞紙上の輿論の二ヶ月を超えず、人の風評の七十五日を出でず、凡そ一年にして輪轉して、忽ち新流行を生じ、淡然として速かに舊想を忘れんとするの氣質を惟みれば、然に多少の疑ひなきにあらず。西洋崇拜熱の地盤、未だ必らずしも全たく破壞し去られざる也。

且や、是迄は西洋と概稱して只だ一途に汎ねく呼び去るほどにてありしが、今や帝國隆んに武裝して文華列國の環視の間に示威す、斷じて他後に落ちざるの外交を操どらんとするに方りては、時に攻守同盟の渉變もあるべく、自から意氣傾蓋の親しみもあるべく、度量を擴大にしては、快洪なる世界觀によつて、廣ろく大ひに睦和するともあるべし。此時に際しては、排外氣象の至りて狹小なるとを識ると共に、日東帝國本來の國粹として、盛んに世界の新文明を吸收するの氣風橫溢し、斯くて其の形跡に於ては、自からにして再たび西洋崇拜熱を起し來るとのあるとなき乎。意外の風潮に乘つて頓に望外の流行を生じ、騎虎制す可らず、狂勢變す可らざるの狂態を爲すとの多きは、吾同胞に存する遺憾なる短所なり。左れば、思ふ、甚しき保守反動の生起せんとは、寧ろ少なし。反つて憂ふべきは、過度なる外國摸倣病の幾度も回起せんと、これ也。能く之を防ぐものは、消極的の手段にあらず、長く之を制するものは、保守的の反動にあらず。正に元動の地に立ち、機先の制勢を爲し、隆んに積極進取の英斷をとつて以て大中至正の日本的新女子教育の擴張に盡瘁すべき也。少なくとも、攻勢防禦の姿態を取るべし。否な防禦にはあらず、率先善導の大經綸を實施すべき也。

語を寄す、同念の君子。女子は是れ帝國臣民の半數なり。女子教育は是れ帝國教育の半面なり。之が事業に從ふは、眞に一大事業に從ふ也。須からく、一大事業の觀念を喚起し、帝國新教育の基礎を建立し、以て大ひに斯學の煥發を圖り、更

に引いて東洋他邦の爲めの模範的女子教育道を發揮すべきなり。

姿見のうつし

（女學勃興の警戒）

ある法師の歌に、

何ごとも昔をきくはなさけありて、
ゆゑあるさまに忍ばるる哉。

とよみしこそ床しけれ。古き日記を取り出でて、そのかみの經歷を憶ひ、若かりしときの多情變化を顧みるなど、最と笑止にも哀れにもある、ものなれ。玆に、某といふ思ひ深き人ありて、日本新女學が近年の辛苦をあわれみ、近ごろ漸やくに色を反へさんとする幸運を祝して、其が當年の全盛に際し誤まつて一と度び陷いりける僻事を此後再たびせざらしめんと、只管に祈りけり。則はち、明治の十八年十九年といふ、新女學勃興、日の出、滿潮といふ比ろほひの、今は奇異なる記臆を列ね記るし、其如何に熾んにして、而も亦た如何に調子に外れ居りしやを示し、他日反動を惹き起せしとの當然なる故由を解明せり。面白ければとて、下に掲載せしむ。

●明治十八年七月

○十七年十月以來毎週日曜日毎に助々たる鹿鳴館裡に開き來りたる舞踏會第壹期閉會す同舞踏會はヤンソンなるもの西鄕伯の依囑を受けて、舞蹈教師となり、幹事長は鍋島侯、會員貴女紳士七十餘名。

○陸軍々醫渡邊鼎氏經濟雜誌社石川映作氏と共に婦人束髮會を發起す。

●八月

○貴婦人某々等毎月三回上野精養軒に會して、西洋料理の喰ひ方を研究す。

○電信局新に女子修技學校を起して、女子の電信技手を養成せんと決す。

●九月

○木村熊二、島田三郎、田口卯吉氏等新に明治女學校を興す。

○東京女子師範學校教員生徒は束髮採用に決す。

○東京女子師範學校教員生徒間の洋服流行は延いて秋田及び宇都宮兩女子師範學校に及ぶ。

○洋風流行の極、貴婦人方に耳飾のなきを深く遺憾として、爲になす處あらんとしたる貴顯某々あり。

○既に舞蹈會あり、然れば亦夫人乘馬會なからざる可からずとして、これが計畫をなすものあり。

○學習院の女子教科を廢して、新に華族女學校を四谷仲町に設立す。一ヶ年歲費豫定一万圓。

●十月

○男女師範學校會併せらる。

○埼玉に日本衣服改良會なるもの起る。

●十一月

○皇后陛下新設の華族女學校開校式に臨御せらる。

○新吉原某貸座敷主人、藝娼妓女學校を起さんとす。

○時事新報存娼論を唱へて、娼妓は文明の利器、其徳や親密日遂に恥ぢずと論す。

●十二月

○奏任官紳商の奥樣令孃及び有名の藝妓共に婦人慈善會を組織せんとす。

○大坂東髮大流行、東髮の新歌、角の芝居にて俳優の出に謳はる。
○東京府布告條例により浴湯男女の境界を嚴にす。
○大三輪長兵衛氏設立私立大阪女學校生徒二百名の多きに達す。

●十九年一月

○政府娼妓の保護取扱の達しあり。
○華族某氏其結婚式の際に伊弉諾伊弉冊兩尊の神靈を祭る。
○福岡に婦人同律會あり、夫妻手を携へて宴會に臨む、また東京に婦人讀書會なるもの起れり。
○小崎岐阜縣知事藝妓出用禁止の内諭を下す。

●二月

○華族女學校職員俸給令出づ。
○東京病院内に看病婦教習所を開く。

●三月

○東京師範學校女子部の一部上野に移轉して、高等女學校となる。其殘餘は男子部に合併したり。
○建野大阪府知事、特に大阪教育會を開き、六十餘名の議員をして審諮討論せしめたる末、女子高等學校新設の事に決す。
○仙臺光明寺大内某婦人談話會を起す。
○岡山に女子學會なるもの起り、婦人改良を計る。
○福岡婦人協會發會式を擧ぐ。
○京都府戸田宮某妻、初めて婦人醫の免許を受く。

●四月

○吉田京佐、大江孝之、等東京に女子交際會を起す。
○那珂通世、巖好謙、三田葆光、野田英雄、從四菊野等、共立女子職業學校設立運動をなす。

●五月

○女學雜誌創刊の際募集したる懸賞論文日本婦人改良論、此月に及んで、寄送文百十一編、内三編を採擇して、之を當誌に掲載しはじむ。
○陸奥宗光氏紀州和歌山にて男女の關係を演說して、男女同權を說く。
○横濱の紳商婦人交際會を起す。
○淡路洲本に婦人金剛會起る。
○仙臺在留宣教師ホーイ氏、一英語女學校を起さんとす。
○同志社看護婦女學校を新設す。
○福澤諭吉氏時事新報に男女交際論を起す。

●六月

○伊藤博文陸奥宗光等新に二十万圓の資金を募りて府下に一大女學校を起し、教授寄宿の模様一切、純然たる洋風婦人を養成せんとす。
○東京女子商業學校新設の計畫をなすものあり。
○大山伯夫人等と米國に留學したる吉益亮子、府下京橋區に女子英學教授所を設く。
○私立岡山女學校起る。
○万國婦人矯風會レビット夫人來る。
○田口卯吉「日本の意匠及び情交」を出版す。
○甲府山田町生糸紡績場の工女百餘名同盟罷工をなす。
○東京芝區醫師木村某の女二人は醫科大學及び理科大學に入學の願書を出す。

●七月

○工學士中村貞吉等の夫人、評議交換會なるものを起す。
○横濱の外國婦人、万國婦人矯風會支部を設けんとす。
○京都の貴婦人、京都婦人集談會を起す。
○名古屋女學校廢止せらる。

●八月

○工科大學教授服部某外數名、女子職工學校を神田錦町に設く。
○外山博士の女子の教育を論じ併て耶蘇教擴張の法を說くてふ長論文、女學雜誌に連載せらる。
○井上馨、森有禮、澁澤榮一、末松謙澄等、演劇改良會を起す。
○越後長岡に女子親睦會を開くものあり。
○婦人矯風會起らんとす。

○新吉原貸座敷主人等女工場を起して娼妓を教育せんとす。

●九月

○女學雜誌懸賞論文日本女子教育策を掲載す。
○共立女子職業學校いよ〳〵開校す。
○海軍々醫の夫人令孃等新に看病婦學校を設けんとす。
○福島縣中村に中村女學校起る。

●十月

○高等師範學校女生徒の正服は洋服となる。
○岡山に山陽英和女學校起る。
○森文部大臣女子教育令を布かんとす。
○某書記官時事新報紙上に求婚の廣告をなす。
○大日本教育會名譽會員某氏、賞金一百圓を懸けて、廣く男女文章の躰を同一にする方法及び他の一問に對する論文を募る。
○大坂浪花新聞記者坂崎某、東京に來りて女新聞を起し、社員は一切洋服着用の女子を用いんとす。
○中央學術雜誌にて文學士高田早苗、男女同權新策を論ず。
○色川圀士、日々新聞紙上にて日本服を變して洋服に改めざるべからざることを切論す。
○上毛地方婦人大親睦會、松井田驛に開かる。
○和歌山婦人會起る。

●十一月

○前橋の豪商學者、銀行會社員官吏等の細君、前橋婦人會を起す。
○皇后宮陛下を始めとし、女宮等、洋服着用。
○海軍々醫夫人の一派は束髮採用の約束をなす。一時衰退の色を見せたる束髮は亦盛に流行して、女子は高きも、賤きも殆ど束髮ならぬはなし。
○女子にして大學入學を志願するもの多し。
○關西地方の婦人大坂に大懇親會を開く。
○大坂に產婆講習所起る。
○婦人用の帽子大に賣捌けよし。

●十二月

○海軍々醫の妻女姉妹等每月三回相會して、洋食會を開く。
○甲府徽典館の女生徒悉く洋服となり。府下有馬小學校生徒五級以上及び京都師範學校女子部生徒また悉く洋服に化せんとす。
○大坂府立女學校新設生徒百名を募集す。
○福岡の女子十八名連署して、福岡師範學校女子生徒募集の儀につき縣會に建議す。
○加藤弘之學士會院に男尊女卑の是非得失論をなし、田中智學某所に佛教夫婦論を說く。
○京都府知事、自今婦女は剃眉涅齒するを厳し、結髮を過裝ならざらしめ、且數々毛髮を洗滌すべしと告諭す。
○德島女學校生徒束髮洋服を採用す。
○伊勢國津の一女學校新設せられんとす。
○鐵道掛に婦人を用ゐんとするの噂あり。

評論

俳諧又聞記（下）

知十坊

上篇舊派の條末に於て平民的方面より俳諧を觀察すべく約したりき

何をか俳諧を平民的なりといふ乎

予が答案を下すまへ日本派の正岡子規が解せしところを聞くべし　曰く『第一　俗耳を嫌はざる事、

第二　句の短簡なる事』と

而して更に又之を辨じ元祿時代の俳諧は決して天保以後の俳諧の如く平民的ならざりし即ち古事、成語、文辭婉曲、格調古雅等普通の學者と雖も猶解すべからざる所あり天保に於ける蒼虬梅室風調に至りては兒童走卒車夫馬丁も之を解し之を擬す正是れ俳諧が最平民的に流れし時にして最も廣く天下に行はれし時なりと

此言に依り其意を推せば日本派は俳諧は平民的なるを得べしと雖も必らずしも平民的たらざるべからざるにあらずとなすにあり

而して今日の日本派が作るところの句の如きは所謂文辭婉曲格調古雅學者と雖も猶不可解的のものなるにあるべし日本派の初めて世に起るや之に對する非難は多く「わからぬ」の聲なりしが該派は正に此「わからぬ」をもつて句の上乘となし若し『わかる』といはれなば却て意に滿ざりしなるべし假令如何にしてわからなく作るべき乎と工夫せざりしまでも勉めてわかる句を作らんとはせざりしなるべき也

天下を舉げて倉虬梅室の平俗に傾きし時に方りては之を救ひ之を高めんには素より佶屈聱牙なるを以てせざるべからず猶安永天明に於ける蕪村曉台の如くなるべし七部集中「猿蓑」調を斥けて「冬日」調を用ひしは安永復古の主眼にてありしなり日本派の諸士が唱道する所之に外ならず

門前の老婆に示して一字一句妙と解せしむるも妙詩なるべしと雖も解し得ざるも必らずしも不妙にあらざるは已に漢詩に於て定論あり此事必らずしも行々しく論ずる程の儀にもあらざるべし

然れども「わからぬ」をもつて惟一の判決例となすに於ては勢ひ之が答辯を費さゞるべからざる者あるべし然れども若しそれ「わからぬ」句は句の上乘なりとして只だわからぬ句を作らんとせば其弊又なきにあらば要は只だ佳句惡句を別つの識を具するにあるべき也

俳諧は平民的たるを得べし然れども必らずしも平民的ならざるべからざるに非ずの解は斯の如くして別段論ずる迄の事にはあらず有躰にいへば予は句を作る時矢張わからぬ句を作す

が却て面白く覺える者なり

扨は俳諧が平民的普及の力ありしは上記の二要即ち平易短簡にありし故なりし乎

平易短簡は正に其一勢力に算すべしと雖も只だ此二要能く此普及の力たるを得し乎

予をして玆に一問を發せしめよ若し平易短簡が最平民的たる勢力なりしとせば最平易最短簡なる川柳點が何故に最々平民的普及の勢力は得ざりし乎

予は今こゝに川柳點が最平易最短簡なりしに係らず最々平民的普及に至らざりし點を擧げんとす

一、川柳は業俳を禁ぜり

川柳の開祖は元俳諧より出し者なり而して俳諧の弊所を認めたる多々なるべし其一として業俳なる者を禁ぜり即ち川柳の點をもつて專ら門戸を張り之を以て職業となすを嫌ひ何處までも一定の職業あるものにして餘事文を學ぶの則に從はしめんとせり故に今日に至るまで川柳の家元なるものは連綿九代の久しきに涉るも日本全國只だ一人あるのみ他に宗匠なる者を許さず而して其家元も又他に一定の職業ある者にして專ら

之に依りて生活する者にあらず

此點に於ては寧ろ俳諧よりは川柳の方其組織甚だ高尙なりと雖も此高尙なる所は普及の力を失ひし一事なるべし

二、已に業俳を嫌ふ又故に川柳をもつて遊歷をなすを禁ぜり

由來俳諧師は遊歷を以て修行の一となし併せて募金の一方となせり到る處俳友を求めて遍歷し未知の者と雖も直ちに宿を請ひ食を請ひ草鞋錢を請ひ更に怪まず頗る初代の基督教的信徒間の友誼に同じかりき今日と雖も其風未だ全く廢れず田舍に至れば此類の乞食的行脚の徘徊する者少なしとせず川柳は痛く之を斥け一切川柳を以て行脚する者を戒めたり是れ又頗る俳諧に比して高尙なるが如くして遂に川柳の普及を謀る能はざりしところなるべし

其性質より云へば俳諧よりも最平易最短簡なる川柳が最々平民的ならざるは組織に於て俳諧に及ばざりし此二事にあるべし

然らば俳諧が平民的普及の勢力を得しは一業俳、二遊歷、これ頗る都鄙遠近に之を傳播せしめし力たりしと反定するを得

べし

更に川柳につき一考を下すべし其性質が最平易最短簡なるが故に普及の力を得ざりし也何ぞや曰く

一、川柳點の最平易は權威を欠きたり

子規が俳諧の平民的を解し多數の信仰を得る者は平民的ならざるべからずといひ芭蕉は祖師の如く扱はれ俳諧は一種の宗教の如く見做されたりといへり正に今日の舊派の消息は斯の如きなり而して子規は芭蕉の此の如き大名を得しを以て其句の平易簡短にありとせり言ひかへれば俳諧は平易簡短なるがゆへに多數の信仰を博し得たりといふものゝ如し

說正に一理あり正に然る也然れども予をして更に補足せしめば正に左の如く言はんとす

俳諧が宗教的信仰を博せしは「風雅」と稱する一種の權威を用ひたるなり

宗教の要素に欠くべからざるは權威なり尊嚴犯すべからざる力なり漢詩を解さず國詩を解さゝるものが由來「風雅」なる義をいかに尊嚴なるものと思ひしやいかに之を解さんと欲せしや而して芭蕉に至りて此「風雅」なるものは俳諧のうへに著しく光彩を放ちて其曾て解さんとして解し得ざりし「寂」「幽」などいへる意さへ稍捉へ得るに至りては其「風雅」に歸依するの念を益々厚く風雅の化身として芭蕉を尊崇するの念は益々高く其芭蕉の句を全然完全無缺とし神聖犯すべからざるものとなすも亦又此權威の下に服しゝが故にありとす

川柳が其性質よりいへば最平易なるは寧ろ此點に於て全く其素を欠きしが故に平民的信仰を博すの力なかりし也

二、川柳點の最簡短は儀式を欠きたり

次に宗教的に欠くべからざる要素は儀式なり俳諧が其詞形に曰く季を用ふべし曰く切字を用ふべし曰く何の秘傳曰く何の句法若くは何には關りなきも俳名の授受、宗匠の免許等其儀式あるは平民的信仰の存する所なるべし

尤も正岡子規が簡短といへるは十七字といへる短句の上をさしゝ事にして爰に予のいふ所の簡短とは少しく其意を異にせりと雖も同じ十七字の短句なれども季とか切字とかいへるものゝ存するオックゥなる方が却て信仰を博し得しものは儀式の上の信仰にあらずや

川柳が最簡短なる此に於ては其 最 簡短なるが故に寧ろ平民

的普及の力を失ひしものといふべき也

以上予は俳諧と川柳を比較せしうへに於て俳諧が平民的普及の勢力を得たるの點を略ぼ盡したりと覺ゆ之を約言すれば

俳諧が平民的なるは　平易簡短にありと雖もその平民的普及の勢力となりしは第一權威第二儀式而して之を普及せし方法としては第一業俳、第二行脚を用ひしに因る也

嗚呼これ宛然たる宗敎にあらずや　祖師あり芭蕉これなり敎理あり風雅これなり　牧師あり業俳家これなり宣敎師あり行脚これなり而して傳ふるところの言は平易簡短にして修し易く而して平易簡短の裏には一種神秘的なる以心傳心的の妙味を具す、而して俳友の交は猶會友の交の如く自ら親愛の情尋常の友と異にして殊に地位の尊卑を別たず華族も平民も句の上に於ては高下を爭ひ難くして又間々一堂の下に相會して談笑を縱まゝにするところありこれ頗る平民的の實を表する者ならずや況んや門派を分ち流派をわかつ事猶宗敎の諸派あるが如くして互ひに屹立相下らず風雅の上より見れば無差別こそ眞意なるべきなれど平民的の宗敎としては其派別門別こそなか／＼に熱信をつよむる一方便なるべし此點に於ては秋聲會のユニテリヤン的團躰は小數者を滿足せしむべし多衆を得るの途にあらず又一勢力をなすべき乎否やは考ふべき一事なりといふべし（然れども予は秋聲會の一人として目下の秋聲會の主旨を善とし假令多派を得る能はずとも此團躰を維持せんことを望まざるべからず）

俳諧が斯の如く宗敎的組織なることこれ平民的なる所以にありとす

而して現今の舊派なるものは正にこの平民的宗敎の宣傳に重きを存するもの也

然れども宗敎界に腐敗の氣あるが如く正に舊派俳諧に腐敗を生じつゝある也

之を改善するは今日の急務ならずや今や「風雅」なる俳諧勢力は漸やく衰滅に歸さんとす世の文明に隨つて「風雅」の勢力は衰滅すべき乎何ぞ之を助長せざる

往時俳諧的風趣は茶事と共に社會万般の事に及び衣服飮食器具皆なこれが勢力の下に服せり今の文明的社會の衣服飮食器具は俳諧的風趣を加ふるの餘地なき乎

「風雅」の權威を文明の光彩の上に赫々たらしむるは抑も誰ぞ文明的平民はもはや俳諧に歸依するに足らざるとなす乎然らざるべき也然らざるべき也。

外國人が傳道義捐の心懸

（心）

外來宣教師に對する批評は、殆んど容赦なきさま也。されど、妙齡の乙女が、万里の異邦に渡來し、花期を忘れて只管に傳道に熱心するの爲體を見れば、誰か其の同情の健氣なるに感動せざらんや。此の人、既に然り、之を送つて遙かに之に同情を寄せ、見もせず知りもせぬ異境の國民に莫大の義捐金を寄する人々に對つては、更に敬服の念ひ禁じがたし。或人は曰く、外國人が海外に傳道資金を送るに方りては、其の目的とする國人の如何にも未開不文なるとを想像し、人類として極めて劣等なる生活を送れるよしに説明して、以て其の義捐の心を刺激せらるゝ也、左れば吾日本の爲めに外國にて其の海外傳道資金を募集せんとするときは、格外に日本の醜態を評判し、さかむに彼等が憫惻の心を動かさゝる可らずと。此を以て、外國人が其の異邦傳道の主旨を以てする義捐金の多きを見ながら、反つて之を歡こびとせざるものあり。左れど余は、之に對する榮辱喜憂の感情を記するを暫らく止どめ、一層甚しく吾が心を動かす所のものあるとを言わん。蓋し、果して外人は、異邦を憫れむの故によりて盛んに義捐を爲すなりとせんか。よしたとひ此情を實なりとするも、抑そも他國を憫れむの誠によりて、報ひなしに巨多の義捐を爲すと云へる仁心は、眞とに贊美すべきものにあらずや。見渡せば、亞細亞洲中、眞乎獨立の國、吾國の外にはなし、眞乎文明の行渡れる國、吾國の外にはなし。而して、吾國が、朝鮮の慘狀、支那の醜態などを聞くは既に久しっ其他安南、ビルマ、印度等の屈辱を聞くは亦少なきにはあらず。よし之を一段劣等の國として看下するとの當然なりとせらるるも、左らば同時に之に向つて義捐するの氣風は果して幾何まで我國に行われ居る乎。試みに、之を外國宣教師が義捐金送達の心掛の宜しからぬとを慨論しつゝある社會に就て問わん。其の社會に於て、其社會が憫れなりと觀ずる劣等者の爲めに抑も幾何の義捐を爲しつゝありやと。看よ、憫れむ

べしとして義捐するの心は、既に一段の進歩にあらずや、然るを、彼を責むるには、更に高等の理想を以てし乍ら、自から求めては此の一段の進歩をすら遂げざる、寧ろ恥辱にあらずや。

今の教界獨立論

外國宣教師と事を同もにする色々の事業に於て、捗々しからぬもの最と多し。玆に於てか、種々の不平あり、種々の批評あり、横議論難、紛々として亂糸の如し。左れど、詮ずる所ろ、其弊元を外國宣教師に歸せざるものは殆んど稀なり。吾輩、生平此事を思ふて獨り笑ふこと多し。試みに、此事、此時、外國宣教師なるものなからしめて、其責の直ちに何處に歸すべきやを明察することを得ば、玆に面白き現象を曝露するならんとは思はるゝなれ。今の共同事業に於ては、外國宣教師と云ふものこそ最と迷惑の人々なれ、而して、一種の族に取りては、此に自己防禦の辯解を爲すことほど、簡易にして都合よきことはなかるべし。斯て責任を逃れ居るもの太はだ多からん也。左りとては、神洲人士の心に、恥かしき處置ならずや。

此故に、近來往々耳にする獨立論などは、一と先づ此の隱れ場より離れ、直ちに責任に當り、苦き經驗を嘗め、餘程の艱難を經たらん後にあらずば、未だ以て賴みとするに足らず。今の獨立論は、必竟無責任なる我儘息子が慷慨するに異ならず、到底今一段の悟りは無かる可らざる也。左れど、凡て獨立論なるものゝ最初は、皆な如此きものなり。少年が、先輩師父の手より離るゝときの空なる抱負は大抵此の如きものにて、斯て世路の艱難に際會し、初めて昔しの有がたみと、當年の我儘なりしことを悔ひ、此に初めて天助自助の秘義を自覺し、獨歩獨立の樂しみを味ひ、かねて其の容易ならぬことをも瞭解し、斯て人を責むること自から寛容となりて、則はち、穩やかに人の助力をも受け、又た人と事を同もにするにも至るもの也。今の教界獨立論は、此運行の初歩を爲しつゝあるものなれば、其の太はだ我儘なることは言ふ迄もなけれど、到底は眞の覺悟にも達すべしと信じ、一と先づ容赦せざる可らず。たゞ獨立論の實行は、何如にも困難なるものにて、自由に論評する時ほど容易きものにあらずとの一事は、くれ〲も其の發程に於て承知せられたきもの也。

爛煥

黄葉片々

仙台青葉町　山月子

天高うし氣澄む、霜楓に染んとする木々の梢は紅を染めて士人の晩節を示すものゝ如く、行く川の流れは斷ずして不斷信仰鞏固一貫を教ゆるものに似たりけり、範を爰に求めて探索に啓すれば、胸襟自ら清爽、心を清めて石上に默想すれば、神想自ら天父と結ぶ、此時清淨くが如き明鏡に照り、照臨る眞實遠からざるを知す、遂に蹶び一年有餘未見の諸君に謝すと云爾

秋十月九日　[illegible]に於て

（一）自由平等説

書生の間に喧しく聞ゆるものは自由平等といふとなり、されど宗教を解せぬものにして、眞正の自由を知るべき筈なし、絶てなきなり、愛を識らぬものにして、眞正に平等を解すべき理なし、絶てなきなり、余は、自由と稱して譯も解りもせぬ小不平、小理窟を並べて、大に忍びて大に爲す大人の心胸を知ると能はず、平等と稱して國民の所有として尊ぶべき人物を貴ぶとを知らぬ人を見る時に於て、誠に其人の爲に痛惜悲へ難きを感ず。

（二）報恩の心

人あり返さるゝとを顧ずして我に善なる利なる事をなす、之を是れ其人の恩といふ、恩は即ち基督の心なり、之に感ぜぬものは、人性の高尚なる作用を欠くものとやいはん、かゝる輕薄な風俗に多くなり行かば、國家の前途を如何すべき、今日に於て、報恩、報徳抔といふ文句の疎んぜらるゝにつけて、彼の朝には東家に、夕べには西家に、處々を寄食し廻りて、鐵面皮となり、報恩の心殆んどなくなりたる者にして、我は斯く〳〵の親戚ありなどゝ、自ら其悪性質、悪習慣に執着し、誇稱するもののあるを歎ず、四恩を報ずるは、露佛子の本務なりとか聞きぬ、況んや基督によりて天父を知らしめられし者、豈三思せずして可ならんや。

(三)片田舍の基督敎會

初めて遇ひし一傳道者に聽く、其人夏期或る處に赴き、說敎の後、質問あらば答へんといひしに、一信者進み出でゝ曰く『新聞に斥候といふ字ありあれは如何なる意味にて候や』と、一人又曰く『支那人の事をチヤン／＼坊主といふは、何故にて候ぞ』と、信者にして斯の如き問をなす、而して敎を信ずるに、他の阿彌陀宗の如く、又他の講中の如く『死ねば助かる』といふやうなる考にて、實際道德の如きは餘り考へぬ者多し、而して其傳道者も亦平氣にして憂へざるもの〻如しと、嗚呼片田舍には斯の如き可憐の同胞もあるなり。

(四)忘

幾分か辛酸を嘗め、神によりて救はれ、導かれて、恩怨二つながら忘るゝことを學び得たり、たゞ時に觸れ事に當りて動く我が愛憐の情と、我が慷慨の念とは、之を抑ゆるに難くして數日執着の苦に陷ることなきに非ず、我は此天地の間に立ちて、寂しく弱きを感ずると多し、嗚呼我が主の心を知るは何れの時ぞ。

(五)比較宗敎

比較宗敎の研究は、たゞ敎相上に於てのみす、若し更に一步を轉じて、其所謂秘密なる靈的修養の中に入り、研究を試すとあらば、相互の間更に一層の生面を開くとあらん、(勿論是れ人物次第にて、能あり不能あり、輕忽にせば必ず失敗せん)僧侶のユニテリアンを研究するを見ては、佛を棄てたりと驚き、基督敎徒の參禪するを見ては、基督を離れたりと騷ぐが如き小量の時代には、此事も中々行はれ難かるべし。

(六)透徹大觀

明士は物の裏面を徹見し、達人は事の大躰を照覩す、一たび此見地に立たば、古來の聖賢英雄が、或は靜、或は動、或は仁慈の熱淚、或は殘酷の痛棒、呑吐、口にあり、死活、手にあり、外觀頗る撞着して、而も內心調和して無礙自在なるの妙を觀じ、愉快禁ずべからず、凡そ人此に至らずして、人を誤らざると稀なり、事を誤らざると少し、判斷を誤らざると、適用を誤らざること、頗る難しとなす、嗚呼科學、哲學は、人をして小理窟を言はしむるものか、冷淡に生きたる人をも器械視せしむるものか、事物を大觀せしめずして、一部に拘束批評せしむるものか、何すれぞ其れ然らん、邪、學ぶ者に

あり、現時學生社會の風潮にあり、修養の士、一顧する所なかるべからず。

(七)世上毀譽輕似塵

彼れ一方に於ては、超脫瀟洒、不盡の乾坤に無邊の風月を樂む、而も他方に於ては、純情溫厚、國を憂ひ、人を愛し、友を想ふ、吟じて曰く「世上毀譽輕似塵」と、嗚呼西郷南洲は英雄なり、英雄の胸中、熱中に冷あり、冷中に熱あり、一何ぞ直に吾人が心胸を貫く。

(八)嗚呼此師弟

道は以心傳心なり。故に我心にして止み難き熱誠、已り難き誠愛を以て希求するに非んば、修養の地に達せんと難し、文何の位に評すべからず、之を聞く、伊藤一刀齋、山に隠れて後、一人の弟子を教育せしよを、三年有餘の間、一度も劍を教ゆることなく、たゞ水を汲み薪を拾はしめ、之を遇すると奴僕の如し、一日、弟子水を汲み來りて内に入らんとす、一刀齋突然起て其足を掃ふ、弟子驚きて其無狀を訴ふ、答へて曰く『汝は敵を持つ身ならずや、男子門を出づる七人の敵ありと聽かずや、假令水を汲む際と雖も油斷あるべからず、若し油斷せば、何時にても我之を打たん』と、弟子服す、一夜疲れて寐ぬ、一刀齋俄然其蒲團を剝ぎ、木刀を以て其肩を打つ、弟子心に其情けなきを恨む、一刀齋曰く『汝は敵を持つ身ならずや、睡中と雖も油斷すべからず、油斷せば我之を打たん』と、弟子之より益々心を責め氣を鼓して半毫の油斷なからんとす、一日、水を汲まんとして溪邊に下る、汲み了りて樹下に一休す、睡魔忽如として臉に迫る、以爲らく我れ三年間の稽古を期して此處に來る、烏兎匆々、既に二年有餘を經過す、而も未だ一回だに劍道の指南を受けず、堂々たる一箇の武士、斯の如く遣ひ使はれて奴僕も啻ならず、況んや少しく油斷すれば撲打を喫せざるべからず、日月流るゝが如し、素志何れの時か遂ぐべきと、思ひ屈して平日の疲勞一時に生じ、思はず熟睡す、既にして一刀齋來る、足を以て蹴り睡より覺まし、大に怒て曰く『汝は師の目を偸みて睡を貪る者、我が教導の見込なし、直に今より山を下り去るべしと』、弟子其情を陳べ、過を悔ひ切に留まらんことを願ふ、一刀齋漸くにして諾し、曰く『此度限り許すべし、今後斯の如きとあらば決して許さじ』と、弟子精勵益々無油斷を行す、一刀齋一日彼に謂て曰く『竹刀

を以て彼處の瀑水を斬れ』と、彼れ刀を盡して屢〻之を試む、水沫飛散して衣に濺ぐ、未だ快く斬ること能はず、愈々精神を盡して之を試む、或時忽然として一たびよく斬ることを得たり、巖上、人あり、拍手と共に叫んで曰く『旨い』と、仰ぎ見れば師なり、之より益ゝ勇を鼓し氣を激まして一心に之を試む、遂に妙地に達す、一刀齋或る日彼を呼んで曰く『汝最早歸り行くも可なり、今は如何なる敵に遇ふも不覺あるべからず、然れども我れ更に一言を添へん、汝先づ我言によりて慢心を生ずべからず、油斷をなすべからず、下山の後と雖も、常に我が前に在る時の如く思ふべしと』、弟子感泣深謝して歸りぬ、三年の日子、一度も竹刀の仕合をなさずして、微妙不可言の心法を傳へ了れりと、吾人は彼の師弟の間を思ふて、深く之を慕ひ、而して自ら反省して赧顏に堪へざるなり。

（九）愛と殘酷

一刀齋の殘酷は無情に非ずして甚深なる愛情より出たり、道を味へるものは、よく人を愛しよく人を導く、愛は其人の靈をして更生作新せしめんことを欲す、たゞ之を欲するも、生命は生命に非れば解すべからず、悟すべからざるが故に、以心傳心、心華開發の爲めに、外より見て傲慢、殘酷なることをなすに躊躇せず、彼の多辯多説、たゞ言語を以て傳道し得ると思ふが如きもの、多見多聞、たゞ説と文とを以て道を得たりと思ふが如きもの、多くは淺薄未悟の徒のみ、此蹤深奧なる基督の大愛を知ること能はず、たゞ僅かに親切を以て愛と誤解せること多きが故に、道士の愛情熱涙より出る殘酷、痛責、壓制、叱咤等に堪ること能はず、修道の念挫け去りて千里も退歩し、匹夫の小俠、小勇を起し來りて、放逸、反抗、自らの氣慨、俠氣、自由の思想、平等の觀等を口にし誇る者多し、大道の爲め、邦家の爲め、深く惜まざるべからず。

（十）天眞の美

天眞爛熳と自稱する者、多くは天眞爛熳ならず、我は彼の天眞てふ自覺もなく、たゞ其まゝにして美なる少年、少女、小兒等を見る時に於て、愛情轉た禁ぜず、恍として懲えす佇立することなくんばあらず。

（十）女性と改革論

女性にして餘りに傳道を口にし、社會を口にし、改革を口にし、人物を口にする者にして、左程に道のわかりたる、德の

修まりたると思ひし人に遇ひしとなし、蓋し之れ有るやも知れず、されど我は未だ之を見ざるなり、一考すべきことと思ふ。

(十二)無限なる霊界の發生

聖賢の言葉には生命あり、我が生命を以て之を受けずんば、彼が言葉は我が中に入りて我が中に死す、斯て之を無限なる霊界の發生といふ、其感迷道の中には、赤子の首を捻ると一般に[illegible]ずらん。

(十三)時勢と人物

時勢は切迫せり、機運は目前にあへ、善良なる偉人待出でずんば、此千載一遇の日本を奈何せん、之を思はゞ、青年たる者、何人も宗派、信仰、小自由、小勢力、小悲觀を棄てゝ、大に自任修養せざるべからず。

(十四)パウロの一節

初めに宗教、理想、哲學等に依頼し、暫く進んで心霊的経驗の天地に入る、而も人生経驗に熟達する時に於ては、玲瓏透徹なる霊脱を得んを難しと思ふ、恐くは自任に傾き、頑固に陥り、偶像に流るゝ弊あらん、パウロ曰く後に在ものを忘れ前に在ものを望み、神キリストイエス―に由て上に召て賜ふ所の褒美を得んと標準に向て進むなり」と、是れ彼が幾多の工夫鍛錬の後に得來り吐き去りたる所なるを識る。

(十五)宗教的事業の快と不快

宗教界に於て霊脱せる人と事業を語る、頗る快なり、何となれば其中に基督の心、我を動かすものあればなり、宗教界に於て未得脱の士と事業を語る、何となく不快なり、蓋し其中に卑俗の念、我を襲ふものあればなり。

(十六)不言の妙境

賢人に浩然の氣を問へば、曰く言ひ難し」と、哲士に妙を問へば「不言にありといふ、孔子曰く「予れ言なからんと欲す」と、釋迦曰く「四十九年一字不説……吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり不立文字教外別傳摩訶迦葉に附属す」と、我が聖基督曰く「我なほ爾曹に多く語る可ことあれども今爾曹暁るとを得ず」と、夫れ吾人は勉學せざるべからず、勵行せざるべからず、然れども吾人は有限にして神は無限なり、言語に絶し思慮に絶したる處あり、學と行とを以て察する以上、心を以て汲むべき境界あるとを思はずんば、自重の中に

謙遜を持ち、安心と同時に、無限の發達を期する心を持つと、難しとなす。

（十七）不言にして而も有言

聖人は不言の妙境に在り、而も甚だ有言多説なるは何ぞ、彼の不言は我等の不言と同じきか、彼の多説は我等の多説と同じきか、嗚呼有言にして不言、不言にして有言、是れ吾人が心を以て深思精考すべき活問題なり。

心身健全の一助

細谷吉次

編者云く、此篇、質實にして有益、所言皆な熱情と實驗とより發す、故に一句を増減せずして掲載す、讀者其文の素直なるを重んぜよ。

聖哲曰く人は天地の子なりと曰く人は神の子にして又人の子なりと故に心身の健全こそは何人にも肝要なれ又其子孫の爲には特に今日の注意を要す且廣く社會の爲に殊に我大日本の天職の爲に考ふるも甚だ大切の一事とす而して之を詳論するは實に容易の事に非ず吾は今只其一助を説んと冀ふのみ

人世の大事

人世の大事とは何事ぞ人は只肉體の分解を以て終とするものに非るなり啻に歴史上に子孫に記憶せらるゝのみならず其心魂や萬古に存す假令一紙を隔つれば盲目の吾人之を明知する能はざるも其心眼は之を信認す全知全能の神豈に吾人の希望を空ふし玉ふの理あらんや故を以て吾人其親愛する人と老を偕にし長壽を得んと欲するは至情にして可なれ共若し眞の道を蔑視し天職を捨なば禽獸に如かず其人世や一夢なり心靈の痛恨幾許ぞ若又其本躰を認むれば其人世や確實にして貴重なるを知り自信自愛の念自から起り敬天愛人の心を養ひ得て其天職の爲には進んで水火を避けず身命を擲つに至らん茲に於て死は毫毛よりも輕し幽明の隔絶何かあらん如何に早世するも神意に父母の恩に背かざるなり左れど人世を厭ひ利己の爲に妄りに自殺するは慾を恣にし夭死すると何んぞ違はん其罪輕からず夫れ神は生を好み玉ふて其愛禽獸草木等に迄及ぶ基督も神の榮光を顯はせる草木禽獸等を嘉賞し人の不時の死を悼みては之を復活せしめ飢たるものには麪包を與へ病める者は其信仰により之を癒し悩める者の爲には風浪をも靜め玉へ

り且吾人神の榮光を顯彰せん爲には身體の健全誠に肝要なり殊より死生は天の命なりと云ふと雖吾人の智未だ至らず過て命を損する事あり避け得べき死をも避け得ざる事あり〔油斷大敵〕故に居恒常時に注意し道に依り不時非命の死を免かれ壽福を完ふするは吾人の務なり斯くて之を得るに亦神の恩惠とは云ひ乍ら自ら助け以て吾人が心身の健全を保つは天意なり父母の望なり又た國の大幸なり

衛生の必要

而り然して相互の關係密なる心靈の健全に必要なる肉體の健全を保たん爲には平生能く自愛し以て瘴氣の侵入を防がざる可らず世に其生質虛弱ながら攝養衛生の宜しきを得て七八十の壽を保つ人少からず衛生の事注意せざる可らざるなり言ふまでもなく病氣に冒されば早く醫者を請ひ迎へて薬用すべきなりと雖各自の注意により其恢復を早めるなり徒らに服用するも何の効なし總て害あり養生ぞ實に肝要なれ

左に衛生上注意すべき事柄を略記せん

一飲食物の注意(其品質分量滋養素の調合飲料水等は勿論料理にも注意して堅硬物未熟物生冷物多量の偏味等を飲食せずして十分營養を得るのみならず消化の宜きを得よ

二消化の注意(消化惡ければ氣分快からず元氣衰へ血液の循環遲くなり呼吸器をも害せん又諸病を發せん故に能く運動すべし又按摩もよし津液をば飲むべし吐く可らず消化を助け臟氣を養ふ俗諺にも猥に唾を唾けば地の神罰し玉ふと言ふ又一定の時間に於て飲食し且充分咀嚼すべし

三心の平和を得る事(憂を愼み猥りに悲哀激昂すべからず快活なれ無邪にして健全なる快樂を得よ又安眠すべし思ひ煩ふ可らず希望を保つべし失望は死なり餘り病氣を恐るゝ勿れ恐怖心は流行病傳染の一大要素なり近時人々年々流行する虎列拉赤痢等を病めば死を豫定し患者自からアカン最早アカンと落膽す是甚だ不可なり病氣にかゝれば怕れず心を靜かにし病源を治する樣心掛く可し看病人も親切を以て病人を喜ばしむべし實に心の喜は良藥なり魂の强は骨を補す在れど疲勞せし場合には快心の極適上し甦るゝ事あり注意すべきなり

四淫慾を愼む事(病人は無論青年も堅く愼むべし又何人も正氣を呼吸する神洲の民らしく在べきなり然らざれば其

弊只一時一地方に止まる天災の比にあらずして廣く社會に且遠く子孫に及ぶ甚だ大なり實に此潔行は心身健全の一大要素なり

五氣候空氣の注意（風寒暑濕を避け晝夜とも空氣の腐敗を防ぐため流通をよくする事早起して新鮮の氣を吸ふべし又浴後冷水にて拭ふべし寒冒を防ぐ事を得ん餘り暖衣すれば發汗し却て體溫を減ず故に折角皮膚を强硬ならしむる樣心がくべし

六清潔（身體を清潔ならしむる爲め毎朝手拭を冷水にて絞り胸腹兩腕背より足の裏まで摩擦し且拭ふべし衣服の清潔を保つべし室內家外を時々掃除すべし又定期大清潔法必要の場合には消毒法をも履行すべし

以上何れも注意すべき事にして之を怠れば種々の病源を釀し之を守れば其効果實に著し左れど此他尙ほ一の特に必要なるものあり开は呼吸を調ふる事にして吾が研究せんとする主眼なり

呼吸を調ふる方法

扨呼吸を調ふるとは何を意味するか开は呼吸を亂さずして空

氣を成る丈け多量に呼收する事なり如何にして之を爲すか姿勢を正し口を閉ぢ兩手に力を入れ少し爪立て新鮮の空氣を胃中へ十分吸入し腹部を膨脹せしめし後最も靜かに腹部を縮少すると共に徐ろに口より邪氣を吐き出すなり臥しながら出來ざるに非るも少し不充分なり

其心得方

扨又前文の如くして呼吸を調ふる事數分を經ば津液生ず飲み込むべし渴を止む可ればなり又飲食も腹中七八分を適度とす多食して胃に空虛なければ大氣の入る餘裕なし從て呼吸を調へ難くして消化を妨げ又肺をも害せん武術を學ぶ人も胃中の空虛を要す多食せば胸のみにて短急に呼吸する故氣が落着かず息き苦からん食後走れば脇腹の痛むも此理ならん又眠るにも仰向かず少し斜めに心臟を上にして寢るが宜し呼吸を調へ安ければなり飲酒も少量微醉に止れば血液の循環を盛ならしめ消化を助け愁を去り興を發し甚だ益あるが如しと雖其反動のあるあり且度を過し易し從て呼吸を亂し消化を害す且種々の弊害を生ずる外に病源を造る長壽者の飲酒家に少なきを以て知るべし又喫煙は小兒の乳を飲むが如く喫する其方法が呼

吸を調ふるに補なしとせざれ共其性は毒あり肺神經の爲めに害あり新鮮なる空氣を呼吸するの優れるに若かず又勿論壯健の人は注意せざるも晝夜前文の如く呼吸を爲し居るなり然れ共心掛をくべきなり少し疲勞せし時長く勉强せし時又勉强中は時々務めて呼吸を調ふるを要す食事の前後にも亦之を爲せ弱き人は常に心がく可し彼の歌をうたひ互に唱和しつる勞動者は知らず呼吸を調へつゝあるなり

其効果

次に斯く呼吸を調ふる結果は如何と攻究するに血液の循環をよくし心臓の鼓動激しき時にも能く之を治むる事を得ん肺をも補ひ助く上氣も引下り從て腦の惱みも去らん目まいし耳の鳴り鼻のつまる人にも神經病咽喉病腸胃病不眠病にもよろしリウマチスにも其痛む所を撫しつゝ脚氣にも其痺るゝ所を擦りつゝ斯くせばよろし又汽車に醉ふ事船暈を感ずる事なし其他便秘子宮病熱病等種々の病氣に宜からん畢竟黴菌ナドも大氣を呼吸する其元氣に熱殺せらるゝが如くなり又斯く氣を靜むれば深山の幽谷に架せる狹き橋を渡るにも眼が眩らみ蹉跌くが如き憂なしと云ふ又演説を爲すにも斯く鼻より空氣を吸

入し腹部より聲を發せば其音聲能く徹して疲勞も少しと云ふ知るべし其効果の大なるを聖書に曰くエホバ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に噓き入れたまへり人即ち生靈となりぬと深く味ふべきなり

其必要の理由

新鮮なる空氣の如何に血液に肺に必要なるかは皆人の知る所にして病人に海濱又は山里を養生地とし適度の運動を勸むるも呼吸を調へ空氣を成る丈け多量に吸收せざれば何程酸素の多き場所に保養すとて益なし又運動も其効なし何程滋養物を食するも呼吸を調へざれば却て蛋白質物が黴菌の蕃殖を助くる害あり之を調へば運動の不足を補ひ消化を助け營養を得せしむ又黴菌も炭酸化熱の爲に殺滅せられん且又冷水海水浴をなして元氣を養ふも溫泉浴をなして暖をとるも呼吸を調へて氣血を巡らさゞれば却て害あり

先年牛疫流行の節吾其原因を察せしに空氣の流通惡しかりしか或は食物餘り十分にして勞働の足らざりしが如し即ち酸素の不足より血液の不純潔となりしか或は勞働足らずして血液の循環を遲からしめ呼吸を弱め炭酸瓦斯の排除不十分（瓦斯

の排泄は何れよりするも肉體に甚だ可なり）なるが爲に惡疫の發せしが如し是亦吾人の參考とならん

又宗教上の事は素より肉體の事のみに關するに非ずと雖彼の確信を有せる人の讀經念佛唱歌等の功により病氣平癒するは豈に此衞生法に叶へるものならざらんや

人は智情意を有する生存者なるを以て其思想理想を事實に顯はさんとして自己の不完全又社會の不完全の爲め意の如くならざる時は大に苦痛を感じ浩然の氣を失ふ之が爲め有爲の士惜むべき人の早世するは少からざるべし素より吾人默想し神を認知し進んで天父の如く完きに至らば世に勝ち痛苦自から去るべけれど其進歩中にて尙天父の愛鞭を蒙らん時意氣を貴ぶ吾人嗚呼神よ何んぞ吾を捨て玉ふやと云はんとす實に勤儉にして有德なる君子の樂むは天意なり吾人喜んで道に從ふべきなれ共事志と違ふ時は勿論人世の難路を歩む時は萬感浮び來りて神經愈銳敏となり憤怒憂思悲恐驚の爲め或は頭痛に惱まさるゝあり或は眠らんとすれば眼愈冴へ終夜安眠する能はざる事ありて心身を疲勞し消化を妨げ元氣を失ひ或は逆上の爲め時に出血し吐血し或は病熱の爲め鼻つまり呼吸を弱め健康を害するに至らん事往々あり如斯の塲合に生理的に之を避くる能はざるか患者若し少々飲食物を欲せば乳湯葛湯の如き温きものを飲み靜かに運動しつゝ手をもて背を撫で下し臍の裏後稻妻の邊を兩掌にて押し少し仰向き呼吸を調へて胃の伸縮をなさしむるなり然る時は逆上せし血液が胃の働を助けんと又は消化と呼吸の化學的作用により生づる流電氣が全身に傳通するに從ひ能く循環する故ベクテリヤは熱殺せられ心氣自から爽になり出血も止み逆上も下り安眠する事も得て疲勞も休まり食慾も進み元氣を恢復し感情に支配さるゝが如き事なきに至らん以上聊必要の理を示すに足らん

結論

終に吾は左の如く斷言するを得んと信ず衰弱せし人も下腹に力を入れて十分空氣を吸ひ能く呼吸を調ふれば快癒の期を早めん又疲勞せし人も自から按腹しつゝ徐々運動して呼吸を調ふれば恢復を早めん又壯健の人も或は時々體操運動を爲し或は能く勞働して呼吸を調ふれば消化を補ひ血液の循環をよくし血を清め心安らけく胸廣く開け哀も邪念も去り氣力を臍下丹田に沈め元氣を益し寒暑等にも堪ゆるを得て心氣自から清

平になり（皓月の如く明鏡の如くに）且充分吸收せし時は全身に力を得んと是吾が心身健全の一助と題する所以なり誠に一身を修むるに大切なり之を譬ふれば物體は重心が其下面外に至らざれば倒れんとするも倒れざるが如し左れば呼吸を調ふれば安心を得る必然なるか長命疑なきか否必しも然らず其安心長命を得ると否とは豈に生理的に能く之を決定するを得るものならん所が心理に關するや勿論なり且や人全世界を得るとも若し生命眞愛靈魂の光を失へば何の益かあらん只死に優るの痛苦あり故に道情理に從ひて家國又は隣人人類の爲に負ふ各自の使命に盡力し神の榮光の爲に死生を念想せざるものは却て幸なり其は豫期せざるも神其誠と義の爲め心靈に安慰を與へ玉ふべければなり而して天國に於ける交際は靈と誠を以て互に愛を交感する故各個心靈の有する積 消 兩極の愛（他動自動の意味）が相和合して一種の電氣を發し肉體にも亦益を與ふる勿論なり左れど畢竟肉の生命は可死の命にして有限なり心靈は不滅なり彼の己が所行の背徳を知りながら遂に悔改する能はざる人は肉體健全なるも實は禍なり且其責任重き人は人を躓かしむる多きの罪一層大なり或は辨じて云はん意思の强固を示すなりと嗟歎無智の眞相憐むべきなり吾人は何んぞ肉の長命をのみ希ふべき唯以上論ぜし心身健全の一助たる我所見は吾を愛せらるゝ丈け自愛せられよとの義妹紀内スヱ子の忠言と其死により神吾をして經驗且攻究せしめ玉ふ所にして何人にも爲し易き所なるを以て記して公衆の參考に供ふ各自經驗して効果を得られんを祈る。

旅路のをち穂

泡　鳴　子

發句つくらむが爲めにしもあらねど、都をあとに旅立ちして富士のふもとを過ぐる時、ふと一句おもひつきしより、二句三句と折りにふれてうかび出づるがおもしろさに、ひろひあつめたるたびぢのをち穂を、こゝに乾しさらさむもおぼつかなきわざながら、かくし置くにも及ばぬとならむ。○「汽車に寐て」は翁の「馬に寐て」をまねたのなれど、このほかにも、人の讀んでありさうな句あり、乞ふ諒せよ。

富士のいたゞきにしら雲かゝりて、そのうしろに日光かゞや

きければ。

しら雲 に あさ日 つゝむ か 富士 の みね。

やがていたゞきは晴れて、ふもと雲まとへり。

三國 の 雲 に またがツて、かざ見 かな。

またみねにのみ雲かゝりければ。

山姫 の 舞ふかげ 見せよ 峰 の くも。

その夜は金星蝕なりしかば、月のひかりことにものすごくおぼへて。

三日月 の ひかり に くろし 山 ひとへ。

汽車にあきて、あたりの人いまだ眠らず。

かみしむる そくひ を しほ の 旅ばなし。

あかつきの頃、琵琶湖畔を過ぎて。

汽車 に 寐て、睡夢 富士 高し 琵琶のうみ、

京都にて、東寺の和尚のわが碁をならひしことあるをたづね行けば、三年前既に遷化したり。門内の芭蕉むかしながらにおひ立ちて、本堂のいらかをしのがむとすれども、これを愛せし人はかはりて、また相語るによしなし。

亡き跡 の 留守居 や ひく代 かね の こゑ。

大坂に來たりて、日中、茄子をうりありくあきなひあはれにおぼへて。

なすび 賣る こゑ も しなびたり のき端かげ。

神戸に來たりて。

諏訪山 や はげて すゞしき 毛唐人。

汽車にのり合ひたる客の、わが生國淡路の人形芝居と阿波の浄瑠理とは、世のゆるすところなりなどものがたり居たるが、いかなる拍子にや、ゆるすまじきおとをうしろのかたよりもらせしかば。

ふとざを や 阿波 の 浄瑠理 わが人形。

ひとむかし前、わが一家をこぞツていでしふるさとは、窓外雲烟のうちによこたはれども、われを生みにし母うへは、ちかごろ遠き他界の人となりたまひぬ。

淡路島 や かすみ に 浮かぶ 母 の かほ。

須磨より、無光子のもとへおくるとて。

繪 の すがた きみ に 見せたや 須磨 の 夢。

ゆふなぎ や むかしながら の 須磨 の 海。

淡路の燈臺は往てのぼり見しこともあり。松尾崎高く立ちて

西は播磨灘、東は舞子須磨の沖を照らして、船舶これが爲めに安全なり。

　やみの夜　や　天地　ゆるがぬ　燈臺火。

「須磨の月夜」とゝろにうかびては、うたゝ源平のむかしもしのばれて、旅思全くやみなむとす、すなはちこれが詩をつくる、その最後の句に。

　月の夜　や　平家追討　萬古　やむ。

十六七のそんなその子をいだきて、汽車のうへにねふれるもつみなし。

　母　も　子　も　ゆられて　ねふるや　とゝ　の　膝。

播州龍野より揖保川をのぼると里餘、世にも目づらしき岩あり、屏風岩といふ。常陸國鹿島のおかめ石とおなじく、その石脈は奈落のそこよりおこたりといひつたふ。そのかたち二枚屏風を山の絶頂にまでたゝみあげたるが如き奇觀なり。川をへだてゝこれとなゝめに相對して、城の山といふ赤松則村の據城たりしところありて、これを望めば恰も釋迦の天をあふひでいねたるに似たり。小嵐山をかうべとして、すぼみたるところを首すぢとなし、またひろがッて直角に川ばたにとがりたるは右のかたなり、縦一線につらなる山脈を胴とし見ればこれが八枚のあばらぼねは、横にならびたる山々の背にして、この間をきざみたる谷々は、則ち、沈思默考の爲めに、筋肉の落ちくぼみたるならむか。これを寢釋迦と呼びなせし人のこゝろこそゆかしけれ。七八日の月にこのすがた明らかになめらかなる川よどに映ず。川をわたらむとするもの、必らず舟をとゞめて、しばし合掌すといふ。

　人　に　して　見ばや、たふとき　寢釋迦山。

　天工　の　何に　かくすらむ　屏風岩。

ふたゝび知己の訃音に接して。

　また　ひとつ、これ　も　ゆふべ　の　椿　ならず。

行吟。

　いなづま　や　やみ　に　聲　あり　葉　の　しづく。

　あさがほ　や　寢さめ　の　つゆ　の　一またき。

　ゆふがほ　や　夜つゆ　と　しぼむ　あけのそら。

　いち里　二里、秋　の　はて　は　萬里　の　湊かな。

水島灘をわたりて。

　海　に　うかぶ　われ　も　くらげ　か　舟　の　月。

まきわぐる　帆　で　行く舟や　かぢまくら。

讃岐の金比羅に參詣し、そのかう〲しき山のいたゞきよりはるかに都のそらをながむれば、なみ湛々としていづこよりか歸へらむ。

金比羅　に　故鄕　の　しほぢ　をがみけり。

岡山の公園なる後樂園にて。

鶴　しろし、からす　は　庭　の　夜あけどき。

鶴　鳴いて、ひる寐　さめたり　そら　の　いろ。

都をいづるときたのまれし骨を高野にをさめむとて、ふたゝび大坂まで來りしが、わが身不快の爲めこれを人に托し、ひとりこゝろに骨堂をおもひて。

ほね　いくつ　積めども　つきぬいのちかな。

（われさきに句あり、
ほれ　ひさつ　ひろひかれたり　春　の　野べ。
さいふ。これと相對して、おなじきものならむ。）

再び京都に來たり、嵐山にあそぶ。もとより櫻の時節にあらず、而して紅葉いまだ早やし。一杯の酒のほか、また何にをかたのしまむ。

わけ入りて、しば實り　の　子　に　あひにけり。

ゆふぐれに、三井寺をおとづれて。

つく鐘　や　ゆふぐれ　おどろく　琵琶　の　むね。

清水の港に立ちよりて、富士見橋といふ橋にて、

富士　遠く　やなぎ　に　かゝる　橋　の　もと。

三保の松原は前に洋々たる大海をひかへ、後に悠々たる富士を背あふ。われなぎさにうちいでゝ、句を案じつゝ寐ふりしが、よび起こされて目をさませば、いまおよぎしと見え、はだかなる漁夫來たりてひとり立てり。われにをしへて曰く羽衣の松はこゝより五十尋の海底にありて、かしこなる石碑の松はたゞそのかはりによぶなりと、かへり見てこれをゆびさすもおかし。

出て見れば、富士　を　せなか　に　浪　の　おと。

漁夫　ふんどし　を　かたげて　富士　の　輕さ　かな。

久能山にのぼりて。

なみ　近く　うなばら　高し　久能山。

つひにわが家に歸へれば、早や秋かぜの萬里にあまねからむとする時節なり。すなはち、「秋かぜ」の詩をつくツて旅路のあとを追想すそのをはりの句に曰く。

秋かぜ　は　わがふるさと　よ　まる木橋。

今むかし

流水庵

むかしは我れ紙鳶を飛ばして
春風に高く舞ひ
今は我れ鐘のすさびにも
世のつれなきを泣く

むかしは我れ朝顔のめでたきを
露ながら白むくの糸につらぬき
今は我れ鋼のさびしきを
亡き人の聲かさぞ聞く

むかしは我れせまき家な
ひろき世界のたのしき夢に笑睡し
今は我れひろき世界のせまきを
せまき家のひろき暗路にまよふ

むかしは我れ傾むく月影に
まめて見ん明日をたのしみ
今は我れ落つる桐の一葉に
くれゆきてまさる哀れを忍ぶ

むかし今いかばかりそも
うつろへりなながれさ
斷れる春はみじかき夢にさめて
もの思ふ世の秋は來にけり

今は我れ筆とりもてば
かなしき歌のみうたひ
むかしは我れ太刀とりはけば
花を散らして躍り狂ひぬ

今は我れ笛の音きけば
あつき涙のむかしを語り
むかしは我れ鐘の音きけば
うごく心に今を戀ひけり

今は我れ山路わけ入れば
葛の葉のくつるに世の哀れを思ひ
むかしは我れ田中に出れば
さら〳〵と面白き小川の流れを追ひぬ

今は我れ道ゆけば過ふ人もやさ
傷もてる兎のごとせまき小路をえらみ
むかし我れ美つしき衣を纏へば
冠得し王のごとひろき轍をほこりぬ

昔は戀しき人を待つものゝ如く
今は失へる影をさがすが如し
昔は世界はわが爲の家なるが如く
今は我れは世界の爲の贄なるが如し

むかしは夢み今に夢みず
夢みるも夢ならぬまことに驚く
昔はたやすく泣きつ今はさは泣かず
泣きぬとも罪なき涙に春はにほひて

あ昔今花は咲き雪は降れるに
かはらざる世にかはりゆく
人のみ老いてかばかりつらきは
そもや誰が罪世の罪かわが罪か

くづおれて昔を思ひ今を想へば
山は自から高く水は自から深かし
この山にのぼりかの河に釣もせしがな
今はたゞ空に鳥飛び河岸に柳たつ

世はこれが自然はわが友なるか
老い朽ちし身は老い朽ちし草茅に
心のまゝに泣き心のまゝに謡ひて
これよりはいざ死の支度せん。



桂香耶なる涙子をおもひ出で。

某子。

江戸 の むらさき 阿波 の あい
そまる いろ こそ 深みぐさ、
ふかき こゝろ の も に いでゝ、
ゆるぐ 涙子 の いま更ら に
なげかむ さても 甲斐 を 無み。
あゝ、神よ、美の神 よ。
かの ロブ の むかし の それならで、
いへ 代々 に つたはりし
やまひ は、あはれ、つみ 知らぬ
をさめ ひさり の えのがれぬ。
花 は うつろひ もみぢ 散る、
うつせみ の 世 の 定めなき
さだめ さ こそは ちかへれど、
すぎ行く水 の たへかれて
こゝろ は 知らす まよひける かも。

四首

櫻精子

墨染の秋に影は宿れども
　月は昔を語らざりけり。
深山路の月に今宵は杖すてゝ
　さらぬ浮世の涙語らん。
諸侯に遊びし春はかへれ共
　あかぬ名殘よ何處たづねん。
吾妻路の春は更たり故郷の
　雲の果山に霞たつらん。

女學

花園隨筆

(幼兒の教育)

古在豊子

◎生れて二歳に滿ざる稚子の、未だいわけなしとは見ゆるものから、流石に全く、事のよしあし分ち得ぬにもあらじと思はるゝにぞ、少しはしおきといふ事覺えさせおかむとて、お灸の熱しといふ事を知らしめつ、若し惡しき事をなしたらむには、お灸をとの約束をなし置ぬ。折しも兎ある事をなして如何に之れを止むるも聞入れざりしかば、さらば兼てのお灸をとて線香に火を點じつ、其を止めざらむには是をとて示したりしに、お灸の熱き事は兼てしも知りつれば、頻りに之れを拒まんとす。我は猶も其火を捨てず、靜かに稚子の傍にさし寄りて、重ねてさるいたづらをなし玉はむには、是にこそ、再びさる事はしもなし玉ふや否と詰りしに、稚子は線香の火恐ろしと思はぬにはあらぬものから、其答は、又致し候との正實なる無邪氣なる詞にてありき、我は此眞實なる詞にいたく胸を打れ、重ねていひ出む詞をも知らざりしかば、思はず稚子を抱き上げて其頰に接吻しつ、さてつく〴〵思ふやう、嗚呼無邪氣なる我稚子よ、我は何とてかゝる無心なるものに向ひてかゝるしつけ方をなさむとはしつるぞ。あゝ過ちぬ〳〵我若し屢かゝる詞を以て稚子に迫らむには、彼は遂にしおきといふ事を恐れて、心には再び爲すまじと思はぬ事にても、只一時を遁れむが爲に、爲さじとの僞の誓を立つるに至しならむ、幸にも我稚子は、未ださる智慧を持ざりしかば、明らさまに、致し升とは答へしなれ、さても〳〵危き事よ、私は此せつなに如何に我稚子の天眞を傷ひ、其潔白を濁さむとはなしつるぞと、深く心に恥ち恐れぬ。依りて思ふに此一事に限らず、世の塵に汚れたる大人の心を以て稚子に接する内には、日毎の事につけ、如何に彼が天眞を傷ひ、彼が心を汚しつゝあるやらむ。思へば我敎へむとする稚子は、却て我を敎ゆべきものなりけり。敎ゆべき親より、敎を受くる稚子こそ、いとも〳〵可憐にて、親たる我身の罪の程も恐ろしと、我は此時よりさま〳〵其行末を思ひめぐらしつ、親たるの地位を立派

なる、完全なる人に讓り度心地となりぬ。

◎彼は何、彼は何とて、頻りに物の名を覺えむとするは、稚兒の常なり。されば我或時月を指して、月てふ名を敎へ置たりしに、此程そゞろ歩行の夕つかた、我稚兒は三日月を見出して、彼は何と我に問ひぬ。依て我は何心なく月と答へたりしに、彼は不審氣なる顏して、も一つのお月さんは?と問ひぬ。我暫時は其意味を解せざりしかど、更に考ふれば、我曾て敎へたりしは、滿月の夜なりけり。されば彼が三日月を目して同名異物と思ひしも、其理りは却て彼の方にありて、我敎へ方こそそゞろなりしなれと、又もや一つの敎へを受けにき。

◎今我住める地は我祖父母以來の墳墓の地なりしに、我同胞四人、或者は東の都に移り、或者は西の國に住ひて、各々處を異にせしかば同胞打連れて墓詣でなどするとは此年頃絶てなかりしに、此程しも我住める地に、同胞四人暫時打集ふ事となりぬ。さらば久々にて相伴ひて墓詣でをもし、又祭りの事をも執り行はばやとて、出立つ、さて神職方に至らむとするみち〳〵も、我は例の稚兒を伴ひたれば、祭りの間彼が如何になし居るかの氣遣はしさに堪へず、若しも靜粛なるべき場所に於て、騷ぎ立つる事などあらむには、我は折角の祭りの莚にもおち付て侍り居るを得ず。若し中途にて坐を立つの止むを得ざる場合などあらむには、我は兎に角同胞にも氣の毒なりなど、獨り心に危ぶみながら、さて止むべきに非れば、共に其莚に侍りて、稚兒をも其邊りに在らしめたるに、彼は神職の目慣れぬ、裝束したる或は又四邊の光景の物珍らかなるにや氣紛れけむ。思の外大人しやかに圓坐の上に坐しぬ、まづよかりしと我も少しく心落居つ、兎角する間に神職は、亡き我祖父母、母上なんどの靈前にて、いとも嚴なる聲もて祭りの文を捧げ讀みしかば、我も亦此時は最早我稚兒の我傍に在るをも忘れて、亡き人々の御前に在るが如き心地しつ。昔を忍び今を思ひて、坐ろに夢幻の境に彷徨ひしに、折ふし傍に在りし稚兒の小やかなる足を少しく一方に投げ出さむとせしに心付き、彼の方を見遣りしに、彼も亦我顏を見て、頻りにニコ〳〵と笑ひ顏を呈せり。されど我は態と知らざる眞似して、再び嚴肅に頭を垂れ手を拱き居たりしかば、彼は又其笑顏をば、我兄君の方に轉ぜり。常には彼に對して、

いとも優しき兄君も、此時は只其顔を打見遣り玉ひたるのみ。何の報酬をも與へ玉はず、依然として居玉ひしかば、彼は又其次の兄上、妹と漸次に眼を配りつゝ何れも甚靜粛なりしを見て、如何思ひけむ。己れも亦容を正して、一度投げ出さむとせし足をも縮め、我々がなせるが如くに手を拱きつ。以前は只纔に坐せりといふのみなりしを、是より後は、いとも謹みたる態容を繕ひぬ。斯くしつゝ殆んど數十分の久しき、時に或は退屈したらむかと覺しく、少しく頭を擡げては我兄上、次の兄上、我妹と順次に見終ては、再び又己れの態度を顧み、偏に之に肖せむとを力むるものゝ如く、幾度か惰容あらむとしては、自ら之れを正せり。斯て祭りの事果しかば、曩に如何あらむと心遣ひし我は素より兄君達も、太く喜び合ひ玉ひぬ。此時にこそ我は、詞を以て敎ゆるよりも、行ひに依りて敎ゆる事の、如何に著しき効あるものなるかを實驗しぬ。されば日常家に在る時とても、家に在らむほどの人、眞實に心よりして、靜粛になし居らむには、爭でか其感化を小兒に及ぼさゞる事あるべき。さるを只見習さむとの心一つにて、纔に謹める容を裝ふのみ。心は必しも嚴粛なる時のみあるに非れば、小兒の慧眼はやくも之を看破りて、其感化を崇らざるも、素より當然の事なりかし。況してや其心掛だにも、常に持ち居らるゝものにあらねば、小兒の不行義に陷るは、いつしか此方に隙き間あるなりとの事を、事新らしくも感じ初めぬ。是は只容儀に關するとの一例に過ざれど、何事に拘はらず眞實に心より出でゝ行ひに顯さむほどの事、善惡何れにせよ、感化を小兒に及ぼさゞる事あるべきと思ふに付け佛家の所謂冥府に在りといふ常玻璃の鏡よりも、猶且透明なる鏡かとも覺しき小兒の傍に立つと、いとも〳〵恐ろしく、我身の修錬足らざりしことを、親となりての今日此頃返す〳〵も口惜く思ひぬ。況してや小兒てふ鏡に、一度映りし我影は、生涯消えぬものなるをや。思へば、日々に智恵付く稚兒の、傍に在る我身として、其進歩の遲しといはむよりは、寧ろ少しも進まじと覺ゆる程なるにぞ、彼の鏡に我備らざる形の殘らず映らむかとて、我兒引延ばし度と思ふ世の親心の、更に一轉して、暫時我兒の進み中止せよかしと思ふも、是亦極端なる親心にや。

◎女子高等師範學校一覽

○明治廿八年五月調

來歷　○明治七年三月東京女子師範學校創立○九年六月附屬幼稚園開設○十一年六月附屬小學校開設○十五年七月附屬高等女學校開設○十八年八月本校を東京師範學校へ合併(東京師範學校は後高等師範學校と改稱)○十九年二月東京師範學校附屬高等女學校文部省總務局所屬となる(初め高等女學校と稱せしが後東京の二字を加ふ)○二十年十月東京高等女學校文部省の直轄となる○廿三年三月高等師範學校の女子部を分離して女子高等師範學校を設置東京高等女學校を本校の附屬とし附屬小學校附屬幼稚園設置(高等師範學校附屬小學校の女生徒及附屬幼稚園を引渡さる)○二十五年五月附屬小學校分教室設置○廿五年九月附屬幼稚園分室設置○二十六年三月附屬高等女學校、仝小學校規則を制定し附屬幼稚園規則を改正す、十月附屬小學校第二部を開く○二十七年六月本校教育要旨を定む十二月女子高等師範學校規則を改正す

事務員數		
校長		一
教務監督		兼一
附屬校園主事		兼三
舍監		心得兼一
書記	庶務	兼一
	會計	四
	教務	一
雇	助手	一
	事務	一

	本校	附屬高等女學校	仝補習科	附屬小學校第一部	仝第二部	仝第三部	附屬幼稚園	仝分室
教員數	二二	一五	……	四	四	一	六	一
生徒幼兒數	一〇四	二三三	……	一三九	男六七 女七八	男二九 女三九	七九 八四	二二 二八
生徒幼兒組級數	四	六	……	四	四	一	五	一
修業年限	四	六	二	四	尋常科四 高等科二 六	尋常科三 補習科一 四	……	……
每週授業保育時數	三〇 外國語は外に三	一、二、三四學年 二八 五、六學年 二六	三三	一、二學年 二三 三、四學年 二八	尋常科一、二學年 二三 三、四學年 二八 高等科 三〇	尋常科二四 補習科一二	二五	三三以上 四三以下
授業料	……	自一學年至三學年 一、五〇 自四學年至六學年 二、〇〇	三科目以下 一、五〇 四科目以上 二、〇〇	一、〇〇	尋常科三〇 高等科五〇	……	一、〇〇	……

○圖書器械標本器具

品目	部(個)數	價格
和漢書	八、一一四	三、六五一 〇五〇
洋書	一、七一〇	二、七五九 七八五
器械類	五、五三二	八、六七一 六七二
標本類	二、四八二	二、二七一 二〇九
器具類	五、八九七	九、一七七 五五四

◎卒業生服務及種別

	卒業生總人員	教育ニ從事スル者	非役	死亡
高等師範學科	九一	八五	五	一
小學師範學科	二八七	一一四	一四五	二八

◎教員の職に從事すへき義務年限內ノ卒業生

高等師範學科	七八	七五	二	一
小學師範學科	二七	二四	二	一

◎卒業生就職の學校類別

師範學校	高等女學校	小學校	各種學校	幼稚園
六六人	二五人	七一人	三〇人	七人

◎資金及經費

明治廿八年五月十五日現在資金	七二、〇五七、四七五円
明治廿八年度歲入豫定額	三四、四六八、〇七八
內 政府支出金	二四、二四七、〇七八
諸收入	一〇、三一二、〇〇〇
明治廿八年度歲出豫定額	三四、四六八、〇七八

用心錄（一）

山下石翁

志は須からく大なるべし、心は當に小なるべし。放逸散漫にして、心を用ゆること精やかに且つ堅からずんば、則はち托して、一家、一事の切り盛りをすら委ぬべからず、之を況んや、遠大の公務に於てをや。某、性もと魯、加ふるに輕躁の習ひあり、久しく懶慢として、事に嚴そかにあたること能わず、稍もすれば、之れを輕んじて、輙はち過誤すること最と澤なりき。此に於てか、古今先覺の用心極めて堅固なるものに見聞し、錄してもて戒しめとす。惟へらく、此事、男女兩つながら鑑みざるべからず、而して、其の適用や、通じて以て利することを得べしと。即はち、女學雜誌上の掲載を求め、ことに其女學欄内に寄すると云ふ。閨秀の諸君、もし好く之に學んで、深く自から省りみ玉ふことあらば、齊家、裁理の工夫に於て、蓋し、一段自得の妙悟を領し玉ふことあらんなり。某月某日、某、引す。

蝶とりの知らぬ花あり秋のそら。

○德川家康

德川家康が消息文の中に言わく、

主人なる者は一人にても善き人の出來、又如何やうの輕き者にても科人の出來ぬ事のみを心掛け、身を愼しみ候事、專要にて候。如何やうの利發の者も、主人の目よりは行き屆かぬものにて候、まして並み〳〵の者は、拔けがちの事にてあるべく候。其行き屆かぬ所をば、主人より行き屆き候樣に心付け、大不調法ならぬ樣にいたし召し使ひ候事心懸け第一の事に候。召使ひ候もの科に申し付け候もの多きは、主人の科にて候。

○原惣右衞門が母

赤穗四十七士中、老功の士ひにてありける原惣右衞門が母、書を遺して愛子を勵ましたる文に、

過ぎし別れの折から返す〳〵も母ありと思ふべからざるよし申し候へども又立ち歸り吾を訪ふことと孝に似たるの不孝なり、とかく我れ世に在ればかゝる未練も見るなれば我れ

先だちて死を歎へ士の恥なからんとをしめし〳〵、これも子を愛するの道にもあらんと女心の一筋に思ひ極まりてかくなり侍る事に候かしく

六月七日　　はは書留

原惣右衛門との

○取亂したる躰を恥よ

立花龍虎斎、つね〴〵息女に教えけるは、女なりとも士の妻たるもの事ある坐に居合せたる時取り亂したる躰をするは見苦し左様の時は斯る座に居合せたること誠に冥加の事かなと先づ思ふべし扨て其后に事如何やうとも相聰に取り計らふべし、こは如何なるとも動轉する故取亂したる躰もある也。

○千利休掃除のこゝろ

千利休はじめ紹歐に隨從す。紹鴎、利休が才を試みんとて、ある日、庭の掃除をせよと言ひ付けたり。利休、承はりて行き見れば、すみ〴〵迄、塵もなき迄で掃き清めたり。利休、すなはち、あたりの木をうち振ひ、二つ三つ落葉の景色を見せて退きぬ。紹鴎、これよりして、利休が後に天下に名を成さんとを知れり。

○宗易配置のこのみ

むかし宗易、茶室の柱に花生け掛くる釘打たせけり。打つものに釘持たせ、其柱へ押當つる。宗易は客位に居て、或は、低し、又は高しと様々に言ふ。斯くして既に時を移せども許可せず。やうやうに、そここそ善けれと言ひけり。彼の釘打つもの如何なる事とも辨へず、よりて釘の尻もて密かに柱へ痕つけて、其釘を過ちしたるさまにて落しけり。宗易腹立て、又押し當てよと云ふ。彼者様々に押し當つれども又許可せず。餘りの事にて、彼釘の痕つけたる所へ押當てければ、そこそそ善けれといひける。

譬へば、やごとなき人の編み笠、羽織にやつして、花の木の牀几に倚りたれど、田楽、團子に手を觸れず、茶ばかり飲みて休らひたるが如し。貴人忍びありきして花を観るの趣きこそ、ゆかしけれ。

隨感

○二樣の歌の聲に聽く

印度より歸り來りしベツト女史、吾等が爲めに彼邦土人の讚歌を朗唱す。其の純粹土人が歌なるものを聽けば、聲音、鼻にかゝり、調韻、喉にうづもれ、沈痛にして閉鬱、坐ろに亡國の悲しげなる聲に慨泣せしむ。更らに、其のマホメツト敎徒が歌なるものを聽くに及んで、毎節の結句、掉然として尾を振り、『耶蘇の敎徒、須からく聞くべし』と連叫するほとりに至れば、意氣軒昂、天馬空を蹴るの慨あり、短節激調、自からにして人を起たしむ。嗚呼、聲韻の隱くすべからざると、遂に斯の如きか。

○方今事業界の正しき戰死者

亂極まれば必らず治まる。故に不規律、不制裁の後には、自から組織を生じ、嚴として規定せらるゝ所のもの必らずや起る。而して、組織既に成り、規定既に明らかなるに及べば、正しきもの勝を得、直きもの益を得く、之れ本來の正道なればなり也。然れども、此の治安あるの日に至らん迄には、風雲亂雜、正者必らずしも勝たず、直者必らずしも益せざるのみか、多くは不直不正の輩にして初めて成効すべし。即はち、方今事業界の或方面に於ける實相正に是なる耳。左れど、此態も常にあらず、人情遂に久しく安んずべからざる也、惟ふに遠からずして其正しきに還らんか。此時に方りては、今の亂雜界に犧牲となり、正たり直たるが故に失敗せし幾多の義人の骨こそ即はち治安を建立するの基礎とはなりたるなれ。支那人朝鮮人の狡猾を以てして、事業界には必らず正直を嚴守す、これ、事業界に正直の第一緊要なるを證するものに非ずや。左れば、久しからずして事業界に制裁規律を生じ、自からにして人として正直たらしめざる可らざるに至らん也。此時に及べば、今の正しきが故に困廢せし義死の徒は即はち犧牲の用を盡せしを知るべし。後人の大ひに感謝して其功德を紀念すべきものにあらずや。事業界日に非なりと歎じて、直ちに厭惡するは、心弱きわざ也。何事にても、移り行き時

代の亂雜は皆な斯の如きものなり。

○先輩の時世後れ

船頭が舟を推すを見るに、一棹に全身を托し、五躰に精魂を凝らし、足を踏んで蹴つて之を押す。渠終日如斯して其の歩みを止めず、渠は曾て休息するとあらざる也。而も偶たま渠が船を推すの態を見れば、躰張り足踏んで渠は大ひに歩を進めつつあるが如く感ずべけれど、船の進行するに拘はらず、渠が身躰の位地と、渠が精力を托する所ろの棹とは依然として元の處ろにある也。われ悵然として歎じて彼の先輩長老の爲めに思ひ、諸君が拮据盡瘁して寸暇なき迄に世を動かさんとしたるの末、世は稍や動いて、而も諸君が依然として舊の如くなる由緣を諒知し、深く痛たむ。後輩稍もすれば冷やかに評して曰く、渠等頑陋、時勢に後れ、進歩思想を知らず、迂僻同もに爲すあるに足らずと。而も思ふべし彼の諸公をして時勢に後るる迄でに至らしめたる進歩せる時勢は、抑そも何人によりて推進せられたる乎と。諸公、亂雜不制律なる多忙界に役勞し、朝たより夕べに至る迄で、只だ行費作發するのみにして、曾て修養取益するの暇まなく、當年の敏才日に日に役々として即はち如此く時勢に後るるものとなりたり。左れば、後輩たるもの、まさに感謝して其恩を祀るし、永く長老として敬して崇めべきに非ずや。

○民間人士の才の老熟

昔し賈誼年少ふして才長けたり。文帝直ちに之を用ひずして曰く、其才をして老ならしむべしと。

今や、人才の逆境に困處し、野に久しく鬱屈する所ろのもの多く、其才や彌よ老するが如し。賀せざる可けんや。

改革とは、新鮮有力なる元氣が、他方に累積し、遂に其の迸發するの現象なり。今や、其究すること彌ゝ迫り、其の積もること彌ゝ重し。蓋し遠からずして、動揚煥發の機到らんなり。

○自由政代の經世道

經世濟民の語は甚わしき語なり。大丈夫、世に立つ、此の用意なくして可ならんや。

左れど、立憲自由の世に於ける經世の道とは、封建時代に於

ける干涉製造的の區々たる經綸とは、斷じて其規を同ふせざることを知らざる可らず。

今に於ける經世濟民の道とは、自由開放にあり。惣ての要素をして十分に發育せしめ、善惡利害相制して自から完全進歩を爲さしむるにあり。故に、宗敎も、文學も、哲學も、すべて其あらゆる種類を自由に發揚せしめざる可らず。之を方今の政士が大氣宇とす。かの區々たる小感情、拘々たる細趣味に縛せられ、自己黨中の好むが如く國家の發動を按排せんとするが如き、何ぞ自由政代の經世道を知るものと言ふことを得んや。

○平凡なる偉人物

鷗村

曾てジヨージ、マグドナルドの小說「ドーナル、グラント」を讀むや、一人の老靴工が、安息日の戒を犯して、俊逸有望の好靑年ドーナル、グラントの爲に、其破靴を修めしも、其賃錢を受けんことを肯ぜず、曰く安息日なるにも拘らず、なほ君が爲にとりたる常日の勞は其價ひを受けずといふ處に至りて、案を打ちて著者が、かゝる平凡賤業の徒を描きつゝ、其微小なる性行の中よりなほ高尚偉麗なる品質を摘拾するに、感ぜり。また曾てエリオット女史の傑作「アダム、ビード」を讀む、ビードは平凡なる大工の身なり。彼が戀愛談を叙するが中に、其品格の高尚にして欽慕すべき、某批評家は之を評して、是は理想的英國人を描きたるものなりと讃す。テニソンが「嗚呼此剛壯英傑の靈魂」と嘆じたるエナック、アーデンは、一個平凡の水夫なり。ストウ女史が奴隷トムは實に主基督の影なり。瀛西の詩豪文人好んで、平凡なる偉人物を描いて之を謳歌す。抑も當然に大なるべき英雄達士の偉大なる性格よりも、小なるべく見ゆる田夫野老の中より、たまたま高尚偉大なる性格を發見するときは、濱の眞砂より千金の寶玉を獲たるが如きの感ありて、愛好敬慕の念更にやみ難きものなり。而も彼此が共に其人性に寄進するの點より觀すれば、何程の差異もなかるべく、其偉靈は永遠の天にありては、共に同列の聖座を占むべきものたり。神の撰民たる以色列國人の父アブラハムも、富者の食卓より麵麭の屑片を拾ひし乞食ラザロも、天國に在りては、共に手を携へて、同じく榮光の冠を戴けるなり。

新刊書

○女子日本讀本

新保磐次氏著わし、金港堂より發兌す。編纂の苦心淺からずと見ゆ。但だ年を逐ふて漸やく繁縟の文に進むの階段左程ど明らかならざるを惜しむ。

○世界三大宗教

戸川殘花氏著わし、博文館出版す。佛教、基督教、回教の三つを概説し、且つ、回々教、印度教、道教の三つの大意を附錄す。洗れくして公平、普通にして分明なれば、各宗教の概旨を通覧比較せんとするものには太だ有益也。

○青年健康學

津田仙翁の精神修養に於ける公衆の風に久しく仰ぐ所也。翁には「酒の害」を著わし、發行十幾万部、東西南北到らざる處なし。然るに翁尚ほ四方に奔走して足跡之が爲めに遍ねし。左るを今亦た青年の爲めに此書を著譯し、以て教科用書中に編入せしめんとを促がす。翁志年々に鋭なりと云ふべし。序に曰く、此書は試に七八百部を印刷して友人及有志者に頒ち、其の實驗に不都合の所を質し他日再び校訂して檢閱をなし之を印刷に附して最も價を廉くし終れく世の青年間に行われしめんと欲すと。用意信切なる哉。左れば今志は之を精讀し評を寄せて其の完きに至らんとを同しに希ふべし。吾人故に先づ之を紹介し、紹評を他日に讓る。一册五十錢、麻布小農社より發兌す。

○新體詩歌集　　大日本圖書株式會社發兌

外山博士上田學士中村秋香大人等四家の新作詩歌を集めたるものなり。中に就いてやゝ見るに足るべきは中村氏の作なり。外山博士の作は博士創始の新々詩形を執るもの、凡人は未だ其有趣味を解し得ず。博士亦自ら

　予の新体詩に彼此批評を加へむとする者は予の如何に之を口演するかを先づ預め知るを要す

と斷はり置けば、何等の批評も加へ難し。博士は明治十年代に新体詩を創始せるものは、明治廿年代に亦新体詩を創始するの特權あるものと自認して爰に此新奇詩形の創開ありし、また此新詩形は後來大に流行すべしと豫言するなど、其廣言の非實と稍異なる處なきにしも非らざれども、博士が此詩形の發明詠吟を以て得意の色あるや思ひやられて、我詩歌界の爲に大息つくものも。あらん

○ほまれの冑　　春陽堂發兌

作者は當時受けのよき弦齋なり、自序して曰く

　書を作らば常に世道に益するものを作るべし。小說を編まば常に人心を高ふするものをぬむべし。此語余が常に座右の銘として夢寐にも忘れざる所なり云々

されば此小說の如きはこの座右の銘を服膺したる上の得点の作なるべし。物語の筋は木村長門守重成が苦節、其妻白妙が貞操、凡人教訓の一助たるや疑ひなし。筆は相變らず輕妙、但し情熱を欠く處、此人小說の最欠點。

○瀧口入道、不鳴笛　　春陽堂發兌

先年讀賣新聞が懸賞歷史小說を募集するや、其撰に當りたる「瀧口入道」「不鳴笛」の二篇は此頃新ひ裝をなして再び世に現はれたり。作者は當時いれづも高等中學の學生にてありしと云ふ。「瀧口入道」は齋藤瀧口時頼と横笛との戀愛談をば、平家物語、盛衰記などより殊更に書きかへたるもの「不鳴笛」は三代將軍家光の治世に智恩院法親王が竹園皇子の尊きを忘れ、剩さへ法戒を破りて狹斜に出入したるより勅勘を蒙りて甲斐國に配流せられし事實を借へ來りて、親王の志望は幕府の覆滅を圖りて之を計るにありしといふをあやなしたるもの。二書共に小說としての情熱なるものを欠くが故に、讀んで面白味なし。文字及び趣語の如きは頗る苦心したるものと察せらるれども、固より初心の作、未だ大ひに求むべき者にあらず

○鬪鳥嵐　　春陽堂發兌

これ悟痴居士が伊東燕晋等の劇本を脱して、我思ふまゝに書きつられたる由の脚本なり。されば之れ居士が理想の作と見るべきものか。然るに今若し此脚本を其儘に場に上せなんには、看官をして幕より幕へのあまりに變化多くして、紐き合の不明なるに迷はしむるとなきか。假令ば彈正の善惡、大炊助の變心の如き、筋書の儘にてはさんざ譯の解らぬやうなる事なきか。秋庭綾部高田法眼の如き忠節の士を時々ちらと見せ置いて、彼等をして忠節の士たる丈の働きをなさしめざるなど看官は隔痒く思ふなるべし。

片々

◉婦人共立育兒會

明治二十四年一月、弘田長、橋本綱常の二氏率先し、幾多の貴婦人の盡力を以て創立したる婦人共立育兒會は、有栖川慰子殿下を總裁に、鍋島侯爵榮子夫人を會頭に戴だき。昨年の實況、幹事三十二人、會員三千四百四名、一年の收入金（家々の廢物即ち、帶屑、襤褸、硝子の破片等にて寄附す）千六十圓餘あるに至りしが。今回更に擴張し、追ては同會附屬の育兒病院を設立せんとて、基本金募集に着手せらるゝに至りたり。願くは此の美擧をして大に發達せしめんとを。

◉女學勃興の氣運

一陽來復せば、春風の吹溶くべき氷は斯く脆ろく消ゆるもの乎。多年の故障一時に解け、今は四方たゞ新氣運に後れざらんとするに似たり。女學校、婦人會の新設の知らせ、東西南北より到る、何んぞ其の隆んなるや。府下にありても、此等の氣運に應ぜんとや、忽まち二個の計畫現る。一は、大日本女學會の創立。二は、日本の家庭雜誌の發刊。ともに是れ世上需要の增加を見計らひて振起せしもの、之あるは即はち女學勃興の大勢を反響せしなり。

◉女子中等敎育の數學

之れ研究に價値多きの議題とす、岩佐琢藏氏先づ之を試論す、其文載せて「同志敎育」第十四號にあり。氏曰く、算術に於ては數の取扱即ち計算を主とし、代數に於ては數に關する普通の理を論じ、幾何に於ては精確なる形の觀念並に其測定等の事を鍛錬す、故に此三種の初等數學は是非とも修めしめざる可らずと。

◉清國の生糸工女

現今將來、日本女工の最第一は蠶糸生糸なり、而して此に敵たるべきは支那あるのみ。中央新聞（十七日）の記する所ろ左の如し、

同國の生糸は其性質甚好なるのみならず低廉なる賃銀を以て工女を雇ひ入れあるを以て其生産費も多からず然れども現在清國の工女は中等の敎育あるものは足小にして用に足らず已むを得ず下等社會の工女を用ゆる爲め些の敎育なく從て其出來上りの上に於て粗製のもの多けれども若し工女の改良等を爲さば實に我國に取て生絲市場の大敵たるべし今確なる筋より同國製絲場の有樣を聞くに左の如し

楊樹浦にあるもの公和洋繰絲局（湖州人）釜數三百、工女八百人。怡和洋行創立工場（西洋人）釜數四百五十、女工千二百。蘇州河畔にあるもの寶昌繰絲局（伊太利人）釜數五百四十四、工女千五百人。公和永絲局（湖州人）釜數二百八十、工女千人。虹口に在るもの公平繰絲局（支那人）釜數工女未詳。信昌繰絲局（清國官吏所立）釜數三百八十、工女二千人。瑞綸繰絲局（抗州人）釜數二百工女五百人。徐花園にあるもの綸華繰絲局（寧波人）釜數五百、工女三百人。乾康繰絲局（西洋人）釜數三百五十、工女七百人。錦華繰絲局（紹興人）釜數百五十、工女四百人

◉救世軍の女隊員

「救世軍」の女員二名、近頃ろ社友背柳氏の許を訪ひて語りけるは、妾等すでに御國の爲めに身を許せし上は、眞に日本の民となりたし、歸化の方は如何すべきものか、又之を許されし上は、何處かの下宿屋にて日本の婦人同樣に住居し、純然たる日本女子の生計を爲して傳道の務めを盡さまほしと。熱心面に露はれて其の取扱ひ方を請ひ要められけるとぞ。蓋し、傳道者の熱情は皆な斯くありたし。就中、文明國に傳道せんとする外國の人々は、斯樣に其來れる國の風を重んずるにあられば成功覺束なかるべし。

◉當今奇異なる姓氏

いつの頃にかありけん、幕府は令を諸藩に下して、藩士中の珍しき姓名を取調べしめたる中には、平平平平、一七八斗兵衛などいふいともをかしき姓名ありしとかきく。御維新後庶民に名字を許されしより、思ひ〳〵の姓を名乘るやうになり

しが、此頃論功行賞の榮典に預れる勇將猛卒諸氏の、芳名列中につきて、こは珍らしくおかしき名字よと思へるものを點しおきたるが、其中にても尤も珍らしさおぼへしらるゝものに左の如きあり。抑も何如に讀むべきかすら分明ならず、

盛	初陣	中高下	五月女	竹社	貫洞	函海	孤塚
	向役		小園江	傾切	始園	晴紅	儀聴
橋葉	作傾	咲花落	籠盛	寄包	海若	纐纈	流尼
遊	皆	瀬府	上部	東島	宗盛	黒飛	飛鷹
雑集	馬集		海賀	法然	向寺	雁木	泉水
試波		東海上					

◎岡山孤兒院を讀む　と題して我以上の佛教雜誌「禪林」に慨慨するものに云く、綜々彼等耶蘇教徒が教育を事とするに其信徒決して多數にあらず、其教育亦敢て偉大なりと云ふに非ずと雖ども、野蠻の舊風の源泉たる孤兒教育、貧民孤兒救助等の事業は、多く彼等の手中に委ねられたりと云ふも敢て過言に非るべし……佛教界は今や彼れ一少年の為したる事業をも成し能はざる歟と。

◎救世婦人會　彼の偽教救世教なるものに於ては、度々に救世婦人會なる者設けらるゝとなるが、近頃は新潟縣北蒲原郡小千谷町の救世婦人會にては、其會員中より婦人伝道師一人を選出するの事ありしが、此頃木島けい子（廿一才）なるもの其撰に當りしとぞ。

◎雲州松江の女子師範學校　松江市內の有岡知事夫人信子は華族女學校の教授たり、近頃は是等に依りたる此地に女學校を開設せらるゝことゝなりぬ。

◎榮資稻吉歿後　近江川崎榮子は石州流茶道の師範岡本正信一たり。二十五才にして死す、斯の道の為に惜むべし。

◎天保婦人會　は近江日野の老人會の如きか、大坂に於て去十日催さる。

◎宇和島にも婦人會　起る、名けて婦人發達會といふ、盛んなる哉。

◎近江婦人慈善會甲賀支部　は甲賀水口町にて去十三日發會式をあぐ。

◎華族女學校　十年の紀念式去十三日に催さる。

◎仙臺偕行社婦人法會　去十一月開かれ、曹溪大禪師の法話を聞きて感涙せきあへずありしとぞ。

◎貴婦人征卒慰勞會　は北白川宮能久親王妃殿下、並に小松宮有栖川宮等各親王妃殿下を始め、伊藤、蜂須賀、二條、德川、大隈、西郷、野津、陸奥、高島の各夫人、外に十餘名の貴婦人主唱者となり、寄附金の蒐集に着手し、其取扱を一切高崎男爵に委託したり。

◎近江彥根町立高等女學校　の學術演習會は去月十九日に開かれ、太だ盛大にして且つ來會者を感動せしめたり。

◎軍人女學に熱心　すとの前號の記事は、各地の新聞紙に轉載せられたるを見る。

◎延岡婦人會　とは宮崎縣延岡に設立されしもの、九月第一會には九十三名の會員、去月第二會には增して百五十名となり、益す隆盛す。地方の婦人會既に如斯し、市都の諸會豈はずして可ならんや。

◎謠曲「靖國」　の作者は岸山東熊氏夫人照子なり。伊東中將に送りたるを以て名あり、其文、所々の新聞紙に轉載せらる。照子は、花園女史のいとこ。元と明治女學校に學ぶ。

◎大和奈良の宣言　とて名高き組合教會役者七十名の血を啜りての宣言五條の第三に云く、一夫一婦の倫を保ちて家庭を清めんと。

孝婦青木とめ

府下荏原郡六郷村大字八幡塚千四百三十八番地平民

青木トメ

資性溫和にして父母に孝十七父を喪ふ明年母亦癡心病に罹り起居常ならず身亦耳を病み聾となり加ふるに家計窮厄し不幸頻に一家に集まるも克く其艱苦に堪へ誠を母の看護に盡くし一家を維持し三十有餘年初終して夫を迎ふ其夫遊惰放逸家產を却て之が爲めに蕩盡するも敢て怨色なく夫出てゝ後貞節之を憐み勸むるに後夫を迎ふるを以てするも貞節を守り固辭して之を肯せず其志操の堅孝貞の厚洵に奇特とす依て爲其賞金七圓下賜す

明治二十八年十一月十二日　東京府知事從三位勳二等　三浦安

◎宮城縣會　に高等女學校設立の議案出で、勝間田知事、意氣軒昂、大氣焰を吐く、曰く、楠正成、豐臣秀吉、德川家康等寧馨兒たれか之を生むと。

◎東京の名物　を投票せよと實業新聞募集すれば、「女學生の不品行」と題して答へしもの七十五名あり、何等痛歎の識見ぞ。

◎白河婦人會　を再興せよと福島民報は論ず、時勢の傾向察すべし。

◎金澤の女子　北國新聞曰く、京女郎の美は天下に高く、越後女の名は關東に傳はり、愛知の巾幗亦た東海より起りて宇内を睥睨せんとす、蓋し此三地は女子の本場と稱せらるゝもの、然れども京女郎は細きに失し、越後女は太きに過ぎ、愛知の巾幗所謂名古屋ものは輕薄野卑を免がれざるを如何せん、唯だ夫れ細きに失せず太きに過ぎず溫順典雅なるは金澤の女子なるかな、蓋し其溫順は藩祖夫人芳春院殿以來歷傳の涵養にして、其典雅は香道茶道其他上臈貴女の作法遊戲的感化に出づるものならんと。

◎田村武治氏　女學に熱するの故に暫らく實業界に入りたる田村隣水、一詩を遺して清國新開港地視察に赴く、

聊思報効擲此身、决然投袂破蠻塵、蘇杭風月今何似、記否十年相識人。

◎成瀨仁藏氏　「女學一新」の草稿を携へて上京し、遠からず普及社より出版せしめんとす。

◎女帽子　毛織物にて身を裹みたるに、頭のみ露出は甚だ相應しからず。思へらく、天鵞絨製の輕き帽子などにつこらしき形に工夫して、一寸と頭に載するも妙ならずや、それも例の外套的の上衣を着ずしては極めて惡ろし、故に絕對的に女帽子を推薦するにあらず、外套ある上は、頭を被ふものもあるべき自然の數より、此流行を預言し且つは望むと、讀賣新聞(十七日)は言へり。

◎古來英雄　が女子に向つての感想を抽出し見んとて、日本の寄書家は（十七日）左の如く言へり、

源頼朝　靜坐未來記を讀んで曰く成程女子は謀殺罪に問ふべき方穩當ならん

北條時賴　心から心を迷はすべきぞ心を許さずば心配もなかるべきに

新田義貞　義貞樣の御聲が聞きたいばつかりに

僧一休　枕を共にせば一寸一休

織田信長　汝を使用して宜を得ば天下は掌中

豐臣秀吉　眼光炯々も時に困るて

德川家康　中々の曲物敵に刃を假すよりも恐ろしい

◎幸田のぶ子　音樂學校卒業の秀才にて、もと高等女學校明治女學校等に教授たりし幸田女史は、露伴氏の妹也、七年前洋行し、墺國ウインナの音樂學校を卒業し、のち歐米に歷遊し、去九日無恙歸朝せられたり。

北海道小樽　に公立女學校を設立せんとするの議同地に隆んに起ると北海道每日新聞は言へ。

◎文藝倶樂部　の十二月刊行分には、女性小說家の所作を一集せんとす。

◎名古屋演說　女學演說會は近時稀なりしが、名古屋に於ては去十七日盛んに執行せられ、名古屋の婦女(加藤鎭明)、本邦の女性(稻沼錦代太)、女子の天職（星野又吉）の三氏演說す。

◎婦人手藝會　壬生伯、由利子、渡邊男諸氏の發起になり、華族及其舊臣の婦女に手藝を教授する爲に設立したる京都の婦人手藝會は存外の好成蹟、すでに尼越蒔輔氏は中京に其第一分會を、竹村藤兵衛氏は下京に其第二分會を開かんとの計畫中のよし。

◎殉難者遺族扶助金　の募集はさきに本誌廣告にも見えしが、金額すでに三千餘圓に達せしかば、第一回分は之にて締切り、各府縣知事にあて其配布方を委囑したり。

◎函館婦人會　も亦た前項と同主旨の美擧あり、近頃ろ手工品展覽會を開き、軍人遺族扶助の爲に慈善會を催したり。

むかし民歌ふて曰く

牢邪、石邪、五鹿客邪、印何累々、綬若々邪。

たれか此の詩を今樣に譯するものぞ。

露　點　之

◎操の鏡、山内秀子(山内一豐夫人小傳)
『安息日學校新聞』(第五號)
◎鄭成功の母(田川氏打死す)
『教育傳道』(第三號)
◎歷代皇王表(皇王となりし歷代の皇女内親王史考)
『教林』(第二十八號)
◎渡會の二位の禪尼へ進ずる返事(圓光大師より)
『彌陀の光』(第十六號)
戰後の女子教育
『基督教新聞』十一月十五日分(森一兵)
◎ゾオンス孃に女學をきく
『同前』(愛軒子)
◎男女孰れが正實なる歟
『時事新報』十一月十九日紙上英字雜誌の批評
◎岩村通俊(御料局長)夫人の美德
『やまと新聞』十月廿六日。『大阪朝日新聞』十月廿八日
◎アボット夫人に關して
其の奇術(時事新報、十月廿三日)。三宅雪嶺の試み(讀賣新聞、十月廿六日)。嘉納理學士之を看破す(萬朝報、十月廿七日)。アボットの化の皮(國會、十月卅一日)。嘉納門弟の說明(讀賣新聞、十月卅一日、十一月一日)。これは力の平均(時事新報、十一月三日)。
◎婦人の氣象(航海につきて)
『やまと新聞』十一月十二日
◎柴四郎氏夫人、龍の舍女史
『朝野新聞』十一月五日

◎婦人の勢力、婦人の愛慕(教育氣風感化の上に於て)
『やまと新聞』十一月八日
◎我國の婦人、我國婦人に望む(軍事教育に於て)
『やまと新聞』十一月九日
◎高杉東行の家庭
福音新報(十一月八日、孤劍生)
◎金澤の女子(婚風上より概論す)
『北國新聞』(十月十三日、十六日、十八日)
◎婦人服裝の色彩及び模樣の流行
『三井吳服店長高橋義雄氏の談』(讀賣新聞十一月九日)
◎イムホーフ孃の德力(秋田にて迫害せられし女教師)
『救世』第八號紙上高野外吉氏の文
◎大佐ライト夫人の傳
『國の聲』第二號
◎女子教育論(神田乃武)
『太陽』第十一號英文欄內

日本宗敎第五號目錄

定價一册八錢、郵税一錢。六部前金郵税共四十六錢也。

明治女學校廣告

明治女學校は、民間同志者の協力により、明治十八年に於て創立せらる。爾來たゞ同志者の精神によりて維持せられ、現在及將來之を繼ゆるをなし、教育の上に於ては、特に信ずる所のものあり。必らずや之に献して吾校の使命を盡さんとを欲す。世上の父兄もし信じて其女妹を托せらるゝとあらば、吾等は歡んで之が教育の任を負はん。

校則

第一條　本校の課程を分ちて普通科及高等科さなす

第二條　學年は毎年四月上旬を始さし翌年四月上旬を終さし一學年を分ちて三期さなす

第三條　授業時間は毎日大凡五六時間にして一學時を五十分と定む

第四條　本校休日は、日曜日、月曜日、國祭日、皇后陛下御誕辰、本校紀念日、冬季、春季、及夏季の休業さす

第五條　武道の一科は隨意科とし心術修養の目的を以て有志者をして修學せしむ

入學規則

第一條　入學は毎學年の初め之を許す但し相當の學力ありて現在級と併進し得るものは何時にても入學を許す

第二條　入學志願者は其の志願の學級に對する入學試驗を受く可し
但し小學高等科三年卒業のものは無試驗にて普通科第一年に編入を許し、全科卒業のものは同上普通科第二年に編入す

第三條　入學の節は當市内在住の父兄親戚若しくは身元確かなる知人を以て保證人となすべし

普通科規則

(一) 普通科は邦語を以て婦人に必用なる普通學の學科を授け普通科卒業の上更らに高等の教育を受けんと欲するものゝ爲めに高等科を設け又普通科、高等科規定の全課目を修むる能はざる事情あるものゝために別に撰科及專修科を設く

(二) 普通科の修業年限を四年とし高等科を二年とす

(三) 隨意科として英學科を設け卒業若しくは退校するとを得せしむ

(四) 直ちに普通科に入りがたき者の爲め臨時に補充科を設くるとあるべし

高等科

(一) 高等科は當分文學部のみの設置にとゞむ

(二) 高等科文學部に於ては專ら和漢洋の三學を授く

(三) 高等科に於ては主として學生の獨學啓發を旨とすと雖とも教師直ちに授業する時間も亦尠からず即ち和漢學とともに毎週各三時間以上英學毎週十時間以上

學費

(一) 入學の際束脩として金一圓を納む可し

(二) 生徒は毎月五日迄に授業料左の割にて納む可し

普通科	一箇月一圓二十錢
高等科	同　[illegible]
撰科	正科同額
專修科	英學(半圓)漢文(半圓)繪畫(半圓)裁縫(半圓)女禮(半圓)音樂(琴三十錢)オルガン(一圓)ヴァイオリン(一圓)武道(三十錢)

但し正科若くは撰科生にして專修科内の科目又は隨意科を兼修するものは一學課毎に金二十錢を納むへし。尤も音樂の兼修は其專修と同額の月謝を納むべし。

(三) 塾生は毎月食料として金三圓塾費及油炭其他雜費として同八十錢を毎月五日迄に納む可し(但時宜により增減あるべし)

東京麴町區下六番町六番地

明治女學校

十二月一日初號發行

繪入りふりがな附　毎月一回(一日)發行

一冊定價金六錢五厘　廣告料一行金十錢(二十字詰)

日本の家庭

●家庭の爲めには家庭の雜誌なかる可らず、現時殊に其の必要を見る●「日本の家庭」は家を治むる道を說く實着周到にして又家庭の樂を增す●文章やさしく說き方面白くして旨深きは本誌の特色なり

[illegible]初號には

●日本の家庭の欄に○發刊のことば
●教育の欄に○家庭教育○いつはり○其他
●論說の欄に○家庭の教育西村茂樹○禮儀論文學博士元良勇二郎○家庭のたのしみ西村正三郎○英雄崇拜と家庭米國博士藏原惟郭○遊につきて島村抱月○日本の家庭の發刊をほぎて高橋絢子○愛は家の基[illegible]錦子○家事教育の必要津田梅子
●小說の欄に○口のとが後藤宙外○改良奧樣小杉天外
その他史傳●たのしみ●はなし●衛生●家事●雜錄●雜報の諸欄に面白きもの多く又美麗なる口繪挿畫數多あり

發行所　東京市麴町區富士見町二丁目三十七番地　**日本の家庭社**

衛生新報

第六十八號　毎月三回　五の日發行

◉◉定價 一部前金四拾五錢◉廿部金八拾五錢◉卅部金壹圓廿五錢◉郵券代用一割增◉全國無遞送料◉爲替は東京郵便局本郷川町郵便局取扱所へ振込め◉見本郵券二錢を送る可し◉

◉◉體裁 官報同形にして官報よりも紙數多し◉分類 社説◉論説◉國家及社會衛生◉公衆衛生◉學校衛生◉軍事衛生◉個人衛生◉批評◉雜録◉時事◉紹介◉雜報等なり◉

衛生新報が本年の大疫に際して公共に盡したるは彼の「防疫實務者必讀」「傳染病に對する學校」「三十年の虎列刺」等の不三不四を發行して全國一般に無代價進呈するを見ても知るべし衛生新報は實に我國の衛生樞要の地位に在る大家諸先輩の協贊を得て紙上に幾多の革新を加へ論に更に花を添ゆるの概あり前に衛生界の好衛生雜誌なり（衛生新報は獨り事實の報道を爲すのみならず國家及社會衛生の如き公衆衛生の如き學校衛生の如き個人衛生の如き順序正しき學術を解説し知らず識らず好伴侶として讀むを要しの間に須要なる衛生の素養を與へ殆ほ良師に就て學ぶの思ひあらしむ故に國家は業務上の良師友として讀まざるべからず其他府縣郡市役所町村役場衛生組合警察署又警察及郡市町村吏員學校教員は職務上の良師友及諸學校は官報同樣公費を以て備置くべき義務あるものと謂ふへし

發行所（今回都合に依り下記へ地を移轉せり）東京市本郷區丸山福山町四番地　日本衛生新聞社

露語獨修誌

十月十五日　第一號

露西亞語ノ研究ハ目下ノ急務ニ非ズヤ而ルニ廻テ大ニ之ヲ唱道スル者ナキハ何ゾヤ。嗚呼天下具眼ノ人ナキカ。

我大日本帝國ノ位置ト東洋ノ形勢トヲ知ル者ハ速ニ露語ヲ研究セヨ

荀モ愛國ノ精神アリテ近日ノ事ヲ見タル者ハ速ニ露語ヲ研究セヨ

商機ヲ把弄シテ富貴ヲ爲サントスル者風雲ニ乘シテ功名ヲ立テントスル者ハ速ニ露語ヲ研究セヨ

本誌ハ前陳ノ必要ニヨリテ發行シタルモノニシテ初テ露西亞語ヲ學ブ者ノ獨案内タリ、所載ノ要項ハ左ノ如シ

露西亞文字ノ種類、發音、綴字、單語、會話、文典、譯讀、等

定價、一部金七錢十二部前金八十錢（毎月一回發兌）郵送料、一部金二錢但一人ニテ同號二部以上購求者ニハ半減トス

發行所　東京牛込區神樂町一丁目六番地　益友社

女學雜誌社發兌書目

若松賤子譯　再版　小公子　一冊廿八錢　郵税八錢

鈴木弘恭大人講述　六版　百人一首講義　一冊廿五錢　郵税四錢

巖本善治君著　吾黨之女子教育　一冊八錢　郵税二錢

布川靜淵君著　俳諧史傳　一冊廿七錢　郵税四錢

クリスマス用　中島俊子作　詩とき猫と鼠　一冊四錢　郵税二錢

小説　巖本善治君著　善悪の岐　一冊十七錢　郵税四錢

櫻井成明君著　木村鐙子小傳　一冊八錢　郵税二錢

巖本善治君著　腓立比物語　一冊廿八錢　郵税六錢

巖本善治君著　教育學講義　一冊七錢　郵税二錢

巖本善治君著　高橋傳五郎　一冊五錢　郵税二錢

巖本善治君著　公娼可滅　一冊三錢　郵税二錢

日本女學　一冊四錢　郵税二錢

鈴木弘恭大人述　再版　文法口授　一冊十二錢　郵税二錢

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

再版

巖本善治妻 譯

（リツトル ロード フオントルロイ）

小公子

子供のよみ本

坪内雄藏君批評

原書の精神は無邪氣なる小公子を主人に利己にのみ傾ける老貴族を副主公にして「無邪氣」の周圍に及ぼせる感化並に周圍の「無邪氣」に及ぼせる影響を寫さんと力めたるものゝ如し小說としての價値如何は譯書に就きて論ずべきにあらず只一言すべきは斯く純潔無垢の良小說を紹介したるは女學雜誌社平素の主義よりいふも誠に能く撰みたりと云べし譯文は誠に流暢平易なれど其中に譯者が深切なる苦心の跡見えたり就中長幼貴賤の言語を別たんとて又は文情の調和をはからんとて「キット」「大した」の「鼻が高い」「目がない」等の俗語を用ひたるが如きは殊に全力を濺ぎたりと見えていとめでたし行文の中に餘り多く「御」の字を用ひたるが少しく耳だてど咎むべき程にはあらず「人にいひ〱しました」「しつかり歩いてゐました」など言葉を重ねたるはおのづから優しき女教師が幼童に教ふる時の風に似たり何れも譯者の婦人たるを證してなか〱にゆかし」

森田思軒居士批評

（前略）又た若松賤子を得たり「小公子」の若きは小生竊かに推して廿年來第一の譯となす。

正價二十八錢 郵稅四錢

發兌元 女學雜誌社

●切拔通信の要旨

●全國の新聞紙無慮百數十種日々掲載する所の事項千差萬別世人の必す知らさるへからさるもの擧て數ふへからす然れとも全國の新聞紙を一集して盡く之を各自に通讀せんことは人事の繁多なる今日に在て容易に爲し得へきにあらず是本社の常て新聞切拔通信の業を創始し以て江湖必須の需めに應せんと欲する所以なり

●切拔通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小說廣告に至るまて其委托に應し精閲遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋釆女町廿壹番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

●切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は壹ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一事物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五十錢まで●一會社又は一團体の全般に關する通信は壹ヶ月金五十錢より金一圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約をなすことあるべし●月數に拘はらず件數にて委托せらるゝものは東京は拾件に付金貳拾錢地方は郵稅を倂せ金參拾五錢とす尤も細項は總て號外として件數に算入せず●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

圖書閲覽所廣告

日刊新聞十數種を始め文學宗教政治法律經濟農工商一般の諸雜誌二百種の外、新刊書類小說等及び西洋雜誌十數種を備付け廣く公衆の閲覽に供す

一日見料金一錢○十回以上割引あり○午前七時開場午後十時閉場○年中休日なし

神田區北神保町十九番地（順天求合社筋向）

共立文庫 圖書閲覽所

（追白、本所は前に麴町區下六番町六番地第七號舍にありしを今回右の地に移轉し一層擴張したるもの從前に比して規模頗る大）

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌定價表

前金	壹冊　金拾錢 一年前金　金壹圓（無郵税）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日内務省許可
明治廿八年十一月廿四日印刷
明治廿八年十一月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

布川靜淵　小此木信一郎二氏合著

俳諧史傳

和製美本　紙數三百二頁　中本全一冊

定價廿七錢　郵送税四錢宛　許郵劵代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬ひあらしむ、幸慶何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡、無限の烟波渺々として際なし　俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて諧謔を旨にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を涵養せしめ、幽妙なる詩天地に消遙す。其源流に溯り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、縷讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむるを期したるは、我が「俳諧史傳」なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり。之を聯ぬれば、整々一卷の史篇となす。逸事あり、名句あり。一誦の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如からしめむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確凱切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可らず。

早稻田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る濶大なる、叙事評論の其主題と相叶ふて優美、又閑雅、奇警、又適勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元　東京下六番町六番地　**女學雜誌社**

鈴木弘恭大人講述

百人一首講義

六版

歲暮、年頭の遺ひものとしては、上品にして且つ趣味あると、百人一首の講義ものに及くはなし。而も此講義物の中、本書が其の第一位に立つとは、初版以來改版の度々なるを以て證すべし。

一冊正價二十五錢　郵税四錢

發兌元　女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	一冊定價	金拾錢
	一年前金	金壹圓（無郵税）
廣告料	一行一回（廿七字詰）	前金十錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
	但し不道德なる廣告は謝絶す。懸賞の廣告は社議の上無代價にて引受く	
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし	
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし	

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年十一月廿四日印刷
明治廿八年十一月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲（電話十九番）